1986.3

愛鳥教育

NO.18

愛鳥教育研究会

巻頭言

6年前の当会発足時をかえりみて

愛鳥教育研究会常務理事　下田澄子

昭和55年１月30日、概略次のような趣旨を、連盟の柳沢さんと現職の校長５名により、当時、全国で、愛鳥活動を目立って推進されていた学校の先生方に呼びかけました。

「……純真な子どもたちに、自然に自らはたらきかけ、自然から学び楽しく活動し、豊かな人間性を育成するという立場で、この活動を推進されておられると思います。しかしながら、自然愛護の心情が、子どもたちの心にふつふつともりあがるためには、くりかえし、長い間、自然の中で観察学習や保護活動を進めていく他に道はなく、そしてその事は反面、時間の問題、子どもの興味の持続、理科教育とのかかわり合いなど、多くの工夫と困難が存在します。また更に学校全体が取り組むためには、その方法、共通理解のもち方にも多くの悩みがあり、その上、野鳥や植物など、そのものの実態把握や観察方法、子どもの可能な学習内容、その指導援助のあり方など、非常に多くの課題があります。……（中略）……そこで何とか全国の多くの学校のこれらの営みを、同じ志を持つ人たちで知らせ合い、その上にどうするかなど意見をよせあう意味で……特にこれに取り組んでいくものの横のつながり、組織づくりをしてみたいと考えます。…以下略…。」

この結果、37名の発起人会が結成され、規約の原案や事業の進め方など、この方達に通信によりご検討頂き、５月17日、山階鳥類研究所講堂で、東京近県の愛鳥モデル校の方々に案内をさし上げ、発会式を挙行することができました。

この時、記念講演として、当時山階鳥類研究所資料室長の柴田敏隆先生のお話を伺い、戸倉小梅本教諭から実践発表もありました。現在も同じですが、会として旅費を組むなど、不可能でしたが遠く、三重県、新潟県、栃木県、都下三宅島などからも参加頂き、紙上交換方式でいろいろ意見も寄せられておりましたので、運営についても見通しを持った話し合いが行われました。

その後、連盟のご助力で、雑誌「愛鳥教育」も18号を数え、内容も当初の趣旨に努力してまいりました。また広く一般の方々のご加入も頂き、会員数は、当初の倍増になりました。

なお秋の鳥獣保護実績発表大会においても愛鳥教育は格段に充実し、各発表校の成果の差も少なく、審査にあたられた先生方からおほめのお言葉が多いのですが、この普及には、本会の努力もあずかることが多いのではと考えられます。

唯、現在の問題は、会費が郵送費や印刷費の一部で、連盟に援助を受け、やっと運営されていること、従って、印刷、発送、会計など諸事務も連盟に依存していること、まだまだ支部の数が少なく、研修会の参加も、広範囲であったり、地域や学校の理解を得られなかったり、また多忙であったりなどの原因で、十分に行われないことなどがあります。

そこで、折々心細くなることもありますが、今回書きました発足時のことを、もう一度よくふりかえって考えてみたいと思いました。

集まることは無理ですが、何とか機関誌「愛鳥教育」を中心に、愛鳥教育の充実と普及をはかりたいと考えます。愛鳥モデル校が全部加入して下さったら、経理上のなやみが解消できます。１校でも多く、１名でも多く、加入して下さることにみなさまのお力をお借りしたいのです。よろしくお願い致します。なお60年度までの会費未納の方、至急納入下さいますようお待ちしております。

NO.18 愛鳥教育

1986. 3

目　次

巻頭言……下田澄子　2
愛鳥教育に想う……佐野　弘　4
第20回実績発表大会を審査して……竹下信雄　5
昭和60年度冬期研修会報告……　6
〃　感想……増田孝士　7
〃　感想……岩田晴夫　8
岡　董高氏に聞く(No.2)……下田澄子　9
昭和60年度総目次(項目別)……　10
第20回全国鳥獣保護実績発表大会報告……　10
編集後記

愛鳥教育　No.18

昭和61年3月20日

発行人　田村活三

発行所　愛鳥教育研究会
住　所　〒150東京都渋谷区宇田川町37—10
渋谷レジデンシャルオフィス405
(財)日本鳥類保護連盟内
電　話　東京03(465)8601
郵便振替　東京2—92041
制　作　かなえ書房

愛鳥教育に想う

環境庁鳥獣保護課長　佐野　弘

戦時及び戦後の混乱期に教育を受けた私は、いわゆる愛鳥教育の恩恵に浴していない世代に属している。

当時我々は今では想像もつかない豊かな自然の中で生活をしていたが、山野や川は、生活の糧としてのふきやぶどうやきのこや魚の採取場所という意味しか持っていなかった。自然に親しみ、豊かな情操を育む余裕など全くといっていい程無かったのである。

現在、発展途上国を中心に焼畑や過度の伐採等によって、ぼう大な森林が失われつつあると云われているが、多分その地域に住んでいる人にとっての森林は、当時の我々と同じ対象でしかないだろうと私は考えている。

さて、戦後40年がむしゃらに働き、その結果として経済的には思いもよらぬ発展をみた今日、ふとまわりを見渡せば、あれ程豊かだった自然が残り少ないものとなってしまったというのが現実である。日本のように国土のせまい国にあっては、経済の伸長に伴う自然の喪失という問題をある程度覚悟する必要はあるだろうが、もし我々の世代が愛鳥教育などの自然に親しむ教育を受けていたならば、少しは異なる結論となっていたかも知れない。なにはともあれ、多くの発展途上国などに比べ、愛鳥教育の必要性を主張し国民的な共感を得られる現在の日本は、ある意味では幸せな国である。野鳥や自然を守る意識に乏しく、結果としてではあろうが、自然よりも経済的な発展を選択した我々の世代が、今になって愛鳥教育を云々することは面映ゆいが、反省の意味を込めてであれば許してもらえるのであろうか。

環境庁と日本鳥類保護連盟が共催して例年実施している鳥獣保護実績発表大会では、それぞれの学校が全校というよりも地域ぐるみの活動として、野鳥の保護等に取り組んでいる様子がいきいきと発表され、ある種の感動を覚えるのが常である。自然の豊かな地方の学校だけでなく、都市部の学校も各種の工夫をこらし、カリキュラムの一環としてまたクラブ活動の中で自然に親しむ教育を取り入れ、しかもこのような学校が増えてきていることは、すばらしいと思う。

当然のことながらこれらの学校には、極めて熱心な先生がおられ、適切な御指導をいただいている結果によるものであり、かつて実績発表大会で発表した子供が、今では先生として指導されている話などを聞くことは心強い限りである。

また、これらの児童・生徒がやがて社会で活躍する頃には、確実に世の中が自然志向型に向っているような気すらする。

ところで、愛鳥教育を進めていく上で障害が無く、手放しで楽観できるかと云うと必ずしもそうでないのが現実である。

昨年日鳥連が、現在使用されている小・中学校の理科の教科書を調べたところ、意外にも野鳥を教材として用いているケースが少ないという結果がでたようである。教科書の内容と愛鳥教育の推進とは、ストレートに結びつくものではないかも知れないが、記述が少なければ少ない程、ある特定の先生の負担が増えてくるような感じがする。

また、前述の実績発表大会から類推すると、中学・高校に進むにつれて、折角の各種の活動が尻すぼみになっている傾向がみられる。このことは、受験戦争をその原因として断定できようが、誠に残念としか云いようがない。

将来の進路はともかく、せめて高校時代までは、自然に親しみ、野鳥を観察することに時間を割けるような教育システムを望むことは、無理なのだろうか。多分この問題は、社会的価値観が変わらない限り解決しないものと、私はややあきらめ気味ではあるが。

第20回実績発表大会を審査して

日本鳥学会幹事・評議員　竹下信雄

第20回全国鳥獣保護実績発表大会は、昭和60年12月8日(水)、環境庁（中央合同庁舎5号館講堂）にて開催された。プログラムは以下のようであった。

〈プログラム〉

開　　会	10：00
主催者挨拶	環境庁自然保護局長
	(財)日本鳥類保護連盟代表
実績発表	（発表時間　各校15分）
小学校(5校)	(1)愛知県滝脇小学校
	(2)神奈川県南が丘小学校
	(3)東京都戸倉小学校
	(4)宮城県中野小学校
休　憩(昼食)	
小学校　(続)	(5)北海道天売小学校
中学校(3校)	(6)滋賀県川上中学校
	(8)愛媛県城川東中学校
高等学校(1校)	(9)静岡県県立三ヶ日高等学校
「実績発表大会」審査結果発表及び講評	
表　彰　式	
お祝いの言葉	環境庁長官
閉　　会	16：35

昭和41年に始められた全国鳥獣保護実績発表大会も第20回を数えるに至り、非常にレベルの高い内容のものが多かった。都道府県から推せんされた19校と1団体のうち、書類による選考で選ばれた小学校5校、中学校3校、高等学校1校が、発表大会にのぞんだわけであるが、いずれも高い水準に達していたことはまことに嬉しい。

今回の諸発表で審査員一同の関心をひいたことは、学校における愛鳥活動をスケールの大きなものへと変えていく試みが成果を上げ始めていることである。その試みも多様であり、生徒の父兄や地元住民までもが一体になった運動に発展している例が多い。また、鳥の生息地保護に積極的に発言した例、生態研究識別法を利用した例、個体識別のみならず地域の生態系を対象にしようとした例、通学路を観察コースとして整備した例愛鳥教育を積極的に教科のなかにとり入れた例などいずれも高く評価できる。

発表の方法は従来どおり、スライド、ＯＨＰ、テープレコーダーを使った学校がほとんどで、説明も数人が分担する方法が定着したかにみえる。15分間と決められた時間の中で日ごろの成果を発表するので、あれもこれもと欲張って中心がぼけてしまい勝ちになりやすいのだが、その点もよく整理されていた学校が多い。ただし、同じ内容を表とグラフの両方を使った例、短時間には読みとれない多くの情報を1枚のスライドなどに盛り込んだ例など、一工夫ほしかったと感じたものもある。

過去数回にわたってこの発表を聞いた者として、いくつかの問題点も指摘しておきたい。第1に、推せんされる学校や団体が20前後と少ない数で安定してしまっている。愛鳥モデル校は全国に900余りあり、各地で保護活動に励んでいる団体も沢山ある。もっと多くの推せんがあってよいはずである。地域的な片寄りもある。推せん方法の再検討が必要であろう。第2に、学校と団体、また愛鳥教育と生態研究、小学校、中学校、高等学校と異った立場のものが集って日ごろの成果を競う形式が最適なのかどうか。大規模校と小規模校の比較も難しい。互いに刺激を与え合う利点はあっても、第1の問題が解決して参加する団体と学校が増加した場合、なんらかの整理が必要になろう。第3に、大会の開催の成果を全国にフィードバックできる体制がいかにも不備に思える。書類による選考の段階で、また大会での審査に当って、この点をもう少し配慮してほしいと感じる活動もあり、そうした意見を交換することができる場が設定されるよう望みたい。

保護活動にせよ生態研究にせよ、その成果が明確な形で公表されたときに完結すると私は考えている。特定の地域に、また個人のノートに閉じ込められてしまったとしたら余りにもったいない。その意味で、多くの学校や団体に、この大会をより多く活用していただきたいと思う。

（詳細は、後半の「第20回全国鳥獣保護実績発表大会」の報告をご参照下さい。）

「冬期研修会の報告」

1月26日(日)午前10時30分、新玉川線二子玉川園駅改札口に集合した人数は、総勢80余人。親子同伴歓迎の「お知らせ」が効を奏したのか、親子連がかなり多くなった。

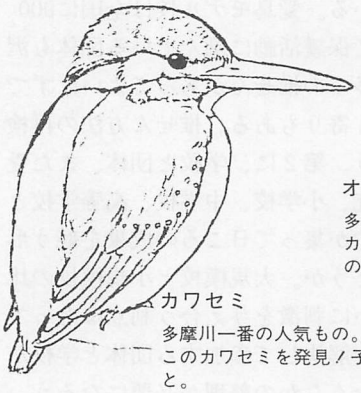
はじめに、田村会長のご挨拶、そして愛鳥研探鳥会リーダーの自己紹介。探鳥会の指導は、リーダーの他、連盟専門委員の原さん、鎌倉自主探鳥会の岩田さんはじめ愛鳥研の多くの先生方にご援助頂くことになる。

冬の多摩川は、やはりカモが中心。オナガガモコガモ、ヒドリガモ、カルガモ、コガモ、それにハシビロガモやキンクロハジロなどそれぞれのカモの特徴や生活の様子がわかる。それにユリカモメやサギの仲間、セキレイ類、カワセミなどの小鳥も加わり午後3時30分、小田急線和泉多摩川駅の解散まで休む暇がない程だった。

しかし、それにもまして、子どもたちの鳥や自然に対する目の輝き、その驚き方。それを見守りつつ共通のテーマで会話をするその親御さんの姿は印象的だった。研修会後の反省会でも「親子探鳥会」の話題がメインテーマの一つになる。

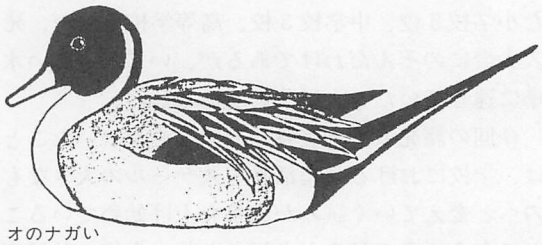
――多摩川でみられた野鳥――

カイツブリ．カワウ・ダイサギ・コサギ・カルガモ・コガモ・ヒドリガモ・オナガガモ・ハシビロガモ・キンクロハジロ・トビ・ハマシギ・ユリカモメ・セグロカモメ・キジバト・カワセミ・ヒバリ・キセキレイ・セグロセキレイ・ハクセキレイ・タヒバリ・ヒヨドリ・モズ・ツグミ・オホジロ・アオジ・カワラヒワ・スズメ・ムクドリ・ハシボソガラス・ハシブトガラス・



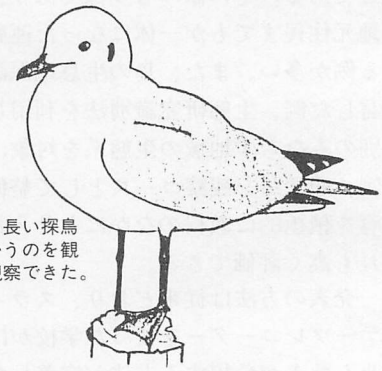
カワセミ

多摩川一番の人気もの。探鳥会後半についにこのカワセミを発見！子どもたちの喜んだこと。



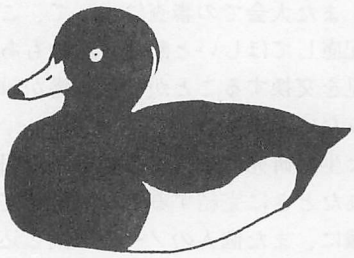
オナガガモ

多摩川で最もよくみられるカモ。オのナガいカモだからオナガガモ。それにしても、カモの仲間のオスはなんと美しいことか。…



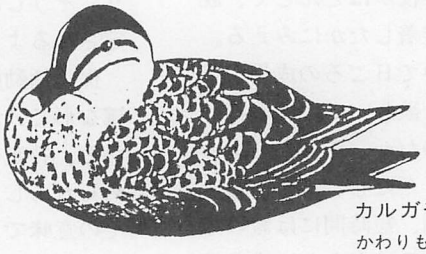
ユリカモメ

多摩川で最もよくみられるカモメ。長い探鳥会中はじめは、この鳥が上流に向かうのを観察、おわりは、下流に帰えるのを観察できた。



キンクロハジロ

指揮者のような頭をしたカモ。全身もぐってエサをとる。つまり、このカモがいれば、そこの川は深いと、予想ができる。



カルガモ

かわりもののカモ(？)。このカモだけが、ここでは留鳥。しかもオスはメスと同じように地味。しかし、地味なりにやはり美しい！

冬期研修会に参加して

多摩川の野鳥を観る会に参加して

東京都世田谷区立松丘小学校父兄　増田　孝士

1月26日(日)娘の学校の呼びかけで、小学3年の娘と参加した。10時30分東急の二子玉川駅集合とのことで、10分前に行くと娘の担任の輿石先生が笑顔で迎えてくれた。定刻近くになると、親子連れの参加者がぞくぞく集まり、その数およそ40人。このような催しに参加したのは初めてのため、正直いってあまり気が進まなかったが、娘にせがまれて参加したような次第です。

10時50分河原に行くと、別のグループ約40人が待っていた。全員が集まったところで、愛鳥教育研究会の杉浦さんから、本日案内してくださる先生方の紹介があり、田村会長からは、「今日は、沢山の子供達と一緒に野鳥を見ることができて、大変嬉しい。自然を大切にしようという気持ちは、子供の時から教えていかなければならない。」と挨拶があり、私も改めて自然保護の重要性を感じた。

いよいよ出発だ。多摩川の河原に出るとすぐ、「ユリカモメ」だと誰かが言った。早速持って来た双眼鏡で見ると、なるほどカモメだとわかったが、お恥ずかしいことに、ユリカモメという名を初めて聞いた。研究会の人は、早速持って来た望遠鏡を地面に据え付け、川に浮かんでいるユリカモメに標準を合わせて、我々に見せてくれた。やはり望遠鏡の方が大きく、しかもはっきり見えた。川の手前の砂利の所に沢山のヒドリガモが胸をふくらませ首を縮めて、じっと目を閉じていた。私は、今日は少し寒いので、鳥たちがじっとしているのだと思った。ところが、この鳥は夜行性なので、昼間はあのようにじっとしているとの説明で、またまたなる程そうなのかと感心した。

我々は、次の鳥を求めて移動した。川床に段差が出来ている所に沢山のオナガガモがいた。どうもそこに鳥たちのえさがあるらしく、盛んにくちばしで水の中をつついていた。オナガガモのおすは、お腹の部分が白く、尻尾が黒くピンと真すぐに伸び、実に鮮かですばらしかった。めすはおすに比べると、何となく羽の色もくすんでいて、お世辞にもきれいではなかった。

川の両岸の空地で、大勢の人が遊んでいた。けたたましい音と砂けむりをあげて、モトクロスのオートバイが走っていた。また一方では、模型のエンジン飛行機がブンブン音をたてて、空を飛んでいた。私は、こんなにうるさくては、鳥たちが近寄らないなあ、もう少しどこか別の場所で、やって欲しいと思った。

河原で昼食をすませた後、午後1時30分和泉多摩川に向けて出発した。暫くすると、また誰かが「コサギがいる。」と言った。白くて、一見鶴のようなコサギが川の中のえさを食べていた。カワラヒワが群をなして空を飛んでいた。セグロセキレイ、ハクセキレイも見た。この時季、多摩川には50種類ぐらいの野鳥がいると、研究会の人が云っていた。今度は、カワセミが小さな木の小枝にとまっていた。早速望遠鏡を据え付けて見せてくれた。普段あまり見ることができない珍しい鳥らしく皆、先を争って望遠鏡を覗いていた。私も初めてカワセミを見た。小さい鳥だが、実にきれいな鳥だった。このカワセミもすぐ、どこかに飛んでいったので、見ることの出来なかった人は、残念がっていた。和泉多摩川の小田急の鉄橋が真近に見えた。鉄橋の下の堰堤の所に沢山の鳥がいた。その中にカイツブリが、一生懸命えさを取っていた。水中にもぐってばかりいたので、望遠鏡で見ようとしても、仲々見ることができず、何度目かでやっと見ることができた。

3時30分最終目的地の和泉多摩川駅に到着、ここで解散して家路についた。

今日のこの経験は、私にとって大変貴重であった。娘も長時間で、長い道程であったが、よく頑張ったし、以後図書館から野鳥の本を貸りて来て、一生懸命見ている。愛鳥教育研究会の皆さん本当にありがとうございました。

冬期研修会に参加して

〝今日の主役は、小学生〟

鎌倉自主探鳥会グループ
岩田　晴夫

集合時間より10分程遅れて、駅の改札口を出ると、目の前に据えられた三脚のそばに、リーダーと覚しき方が立っていた。早速、あいさつの後、集合場所へ歩を向けると、30名程の参加者が目に入る。しばらくして、簡単なあいさつがあり、一行は河川敷へと向う。ここにも、参加者が持ち受けており、総勢70名程の参加者の内、半数以上が子供たちでした。リーダーの方々は、参加者数とりわけ小学生の多さに、やや戸惑い気味のようでした。今日の主役〝小学生〟たちに、いかに野鳥と親しんでもらうかが、この研修会のメイン・テーマとなったわけです。指導法について学ばせていただこうと参加した私たち４名も、急きょサブリーダーに早変わり。以下、主な指導ポイントを交えながら、観察会の概要をレポートさせていただきます。

Ⅰ．橋と氷：新二子橋の下で、水たまりに氷が張っているのを発見した子供たちは、氷の上に乗って割り始めた。単に氷を割るのではなく、順番に氷に乗って体重や氷の厚さ比べをしたり、周囲の水たまりの氷の張り具合を比較しながら、ここに橋が架けられたことによって、環境にどのような影響を与えているかを考えさせる良い材料であった。しかし、先頭集団は川岸はるか先に達しており、時間的制約があることと、観察会も序ノ口とあって、子供たちのノリも悪く、中途で切り上げねばならなかった。　Ⅱ．白いトリ：川岸より、中州と川面の野鳥を観察。まず肉眼で、トリ達の分布と環境の把握を行う。望遠鏡が不足している上に、参加者の多くは双眼鏡を扱い慣れていないため、簡単な操作の説明を行う。初心者の目にも明らかな〝白いトリ〟から探してもらうことにした。中州の水際に、一群を発見！双眼鏡で見ると全身が白いのではなく、背中のあたりが灰色であることを知る。近くに、全身が真白なトリが飛来する。脚や首の長さ、体形等を比べてもらい、一見白く見えるトリには、サギとカモメという仲間があることを説明した。川岸に近づくユリカモメの尾の先端に注意して観察してもらう。黒帯の有無等、個体差があることも発見する。　Ⅲ．オナガガモ♂：白いトリの周りにいる茶色っぽいカモに目を向ける。個体数も多く、識別の容易なオナガガモ♂を「首と尾が長くて、その尾はピンと斜めにのび、黒いパンツに茶色の顔で‥‥」と言葉で描写し探してもらった。中州にあった流木を目印にして、その周辺の個体の行動を追いながら、他のカモと区別がつくようになったかを確認。

Ⅳ．ヒドリガモ：次に「茶色い顔に黄色の額、黒いパンツをはいたカモ」を探してもらう。光線の具合で見つけ難いため、中州のゴミを目印にして二羽並んで休んでいる個体を示す。額の黄色の美しさを十分味わってもらう。近くにいた♀が歩き出すと、♂の一方が追いかけ始めたので、♂♀の色彩の違いやカモのヨチヨチ歩きの理由等も説明した。　Ⅴ．川の窮状：合成洗剤の泡の近くで採餌しているカモを観察しながら、私たちの生活廃水が川を汚していること、トリ達の健康も害していること、カシンベック病のこと、護岸工事のことなどをコメントした。　Ⅵ．エサ集め：数名にトリの餌となる草の実を集めてもらった。ルールは、枯れた草の実に限ること、他人も含めて同じ種類を採らないことです。違反者には、罰ゲームとしてトリの真似やゴミ拾いを予告。時間の都合でまとめができませんでしたが、ぜひ試食もしたかった。　Ⅶ．コサギの指は何色？：浅瀬を歩くコサギの指は、水面から見え隠れし、瞬間的な観察力が養われる。　Ⅷ．ユリカモメの水浴び：成鳥と若鳥が並んで水浴後、成鳥は羽づくろいを入念にしたのに対し、若鳥はパッと舞い上りブルッと身震いしただけ。若鳥はまだ化粧の仕方を知らないのかな？と問えば、まだ素肌で十分なのよ！の名言あり。　堰入りのためカギになって下流へ向うユリカモメの群、堰の近くで逆立ちして採餌するオナガガモのユーモラスな姿、参加者はそれぞれに新しい感動を胸にして、無事帰路についた。

—続、岡　董高氏に聞く—

「声のブッポウソウと姿のブッポウソウ」

野鳥研究の先輩「岡　董高氏」のお話

前号でお話致しました「コノハズク」は、当時図鑑や教科書には、「夏鳥」ということになっていました。

しかし私は、あの中村先生の新聞記事を見た時、私の見たあの大正13年の冬のミミズクが、先生の採集された「コノハズク」にそっくりであると感じたのです。

私は、その時塩山にいたのですが、急きょ甲府に中村先生を訪ねました。そして、「この剝製標本と、全く同じ鳥を、正月に見ました」と申し上げました。すると中村先生は、「そうか」と言われ、強くテーブルを叩かれました。そして「君が若い目で見たなら、それは間違いないだろう。しかし残念ながら教科書や図鑑では夏鳥となっている。ボクも夏鳥だけではないと思っているが、君が見た一例だけでは、学会では認めてくれない。そこで、これから冬のコノハズクの越冬例が3例あれば、学説をくつがえすことができるだろう。」と話されました。

そこで、研究の共同戦線をはって、このことをつきとめることになりました。先生と固い握手をかわして、冬のコノハズクを必ず探そうと決意した時のことは、今でも忘れることができません。

そしてまた、このことが、私と野鳥との深いきずなになって、野鳥が生涯の友となり、野鳥の絵を描く画家になる方向に歩み出すことになったのです。

ところで私は、中村先生とお会いしたあと、父のすすめで警視庁職員になり、池袋署に勤務しました。警務を一生けんめいにやり、賭博犯人逮捕、けん銃所持犯人逮捕などで、総監賞をいただきました。また池袋署長より模範警官の表彰状も頂戴しました。

しかし私は、「このまま警察官でおわりたくない。中村先生とのお約束を果したい。この世には、一度きり生まれてこられないのが、人の一生である。画家になりたい。さりとて父のすすめの警察官も全うしなければ。」など、いろいろ望むことが多く、千々に思いまどっていました。そしてまた当時は、日支事変が熾烈になって、警友にもぼつぼつ召集令状がきており、何時私にもくるかも知れない時でした。

昭和15年、以上のような情況の中で、私は種々考え、池袋署長の好意もあって、青梅署へ転勤することができました。

そのころの青梅は、野鳥のオアシスで、故郷山梨に、その風物がとてもよく似ていました。山が目の前の青梅町森下の交番にしばらくおりましたが、更に奥地の、今の奥多摩町の小河内駐在所に勤務を希望し、それから8年間、奥多摩の「山の駐在さん」として過ごしました。

山のパトロールをすると、いやでも人より野鳥に出会うことが多く、野鳥との交流は日に日に深まっていきました。

「ブッポウソウ、ブッポウソウ」の鳴き声も、夜は無論、昼間も折々耳にしていましたが、冬のブッポウソウの鳴き声は、三頭山や雲取に出かけて、何回か確認することができました。

そしてその後、現在の青梅市友田の駐在所に移りましたが、当時、カラスと仲好しになり、餌を手元で食べたり、あとをついてくるなどのことがあって、地元の人と、野鳥についていろいろ言葉をかわすようになりました。傷ついた野鳥が持ちこまれ、手あてをして、大空に返すことも多かったのですが、また、ガラスにぶつかって死んでしまった野鳥や、山の中で落ちていた野鳥など、いろいろ広い範囲の人から、私の手元に送られてくるようになりました。

私は、図鑑だけでは、なかなか野鳥の特徴を見覚えられないということを考え、多くの人にいつか役立つのではと考え、自分でそれらの野鳥を剝製にしました。昨年これらの80点を、羽村町郷土博物館に寄贈することができ、よろこんでいます。

なお奥多摩町海沢駐在所に勤務していた、昭和32年12月31日…まだあたたかい身体の、落鳥のコノハズクを発見することができて、これまでの資

料と共に、鳥学会、野鳥の会、鳥類保護連盟に報告することができました。

今、私は絵を描くことに主力をそそいでいます。昨年、愛鳥教育研究会に入会し、子どもたちに、自然のすばらしさ、野鳥の愛らしさを知らせる先生方と交流しています。まだまだ緑も野鳥も多い、水美しい羽村町で余生を送っていますが、野鳥とのふれ合いが、この楽しさ、充実感を、もたらしてくれたのだと信じています。（下田澄子記）

昭和60年度「愛鳥教育」総目次

●頭言　（号数－頁数）

15号……田村活三　15－3
16号……下田澄子　16－2
17号……田村活三　17－2
18号……下田澄子　18－2

●愛鳥教育研究会行事

昭和59年度冬期研修会報告……　15－20
夏期（山中湖）研修会報告……　16－4
夏期研修会に参加して……　16－5
昭和60年度愛鳥教育研究会総会報告
山階鳥類研究所にて開催……　17－4
愛情豊かな子供を育てる愛鳥活動…　17－6
総会に参加して……長谷昌治　17－7
総会に参加して……中山辰夫　17－8
昭和60年度冬期研修会報告……　18－6
〃　感想…増田孝士　18－8
〃　感想…岩田晴夫　18－8

●研究レポート

世田谷区立船橋小学校研究主題
「人間性豊かな児童の育成」研究実践経過
石橋寿春　15－6
「理科教科書(小・中)及び学習指導要領
(理科)に於ける鳥類の扱いに関する調査」
杉田優児　16－10
中国遼寧省の愛鳥教育２、３の見聞
飯村　武　17－9
民間愛鳥教育の行方
田中完一　小塊雅之　17－12

●研究および愛鳥活動紹介

研究紹介……下田澄子　15－10
青森県立三戸高等学校自然科学部
愛鳥活動紹介……　16－15
活動例……柳沢紀夫　16－16
「身近でできる野鳥の観察」

●随筆・インタビュー

愛鳥教育に想う……佐野　弘　18－4
岡　董高氏に聞く(No.1)　……　17－17
岡　董高氏に聞く(No.2)　下田澄子　18－9

●愛鳥教育研究会関連行事

昭和61年度愛鳥週間用ポスター原画募集
……　15－末
第19回全国鳥獣保護実績発表大会報告
……　15－22
第19回実績発表大会を審査して
竹下信雄　15－5
第20回実績発表大会を審査して
竹下信雄　18－5

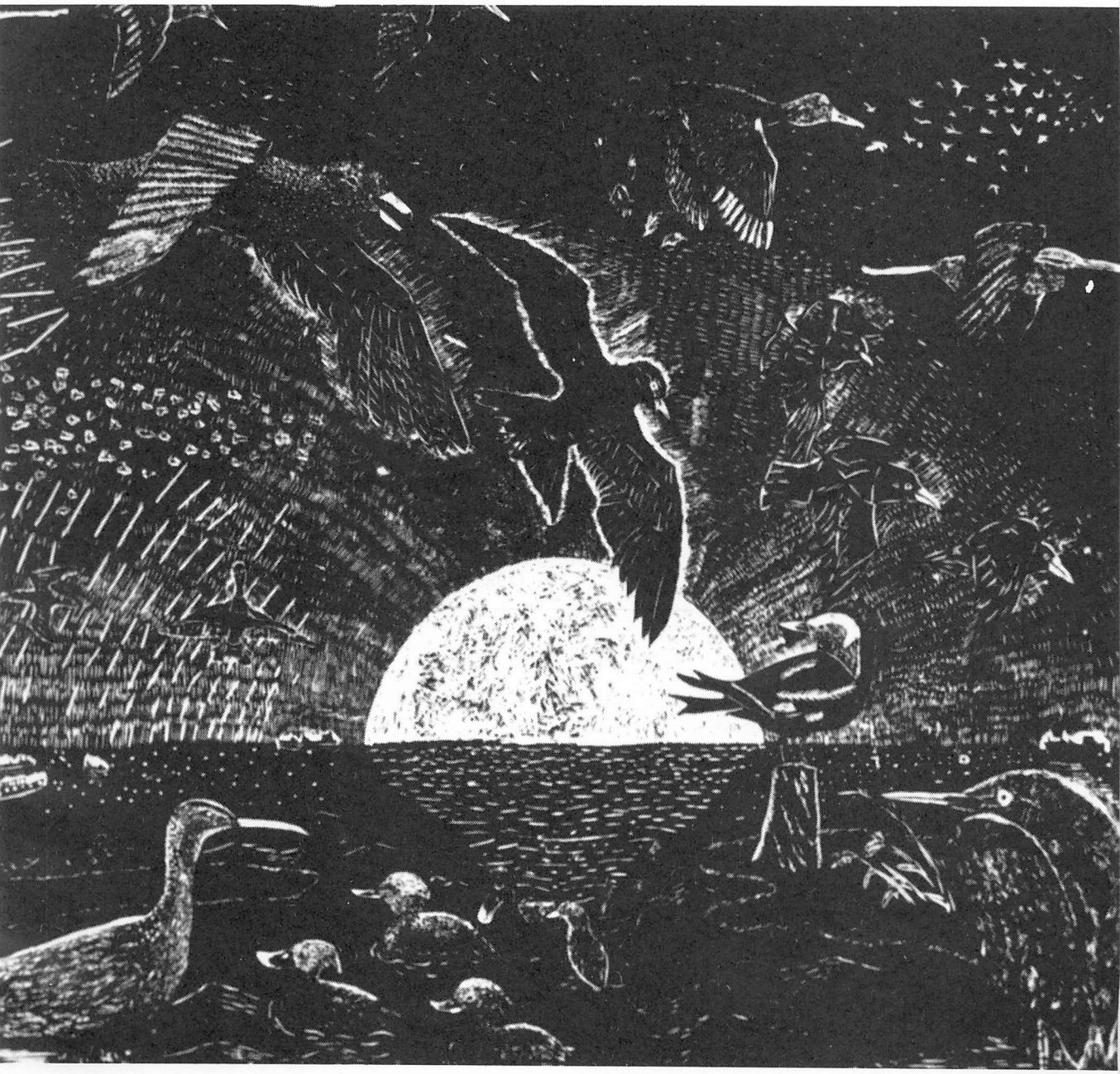
●支部関係記事

北海道支部発足……　15－21
静岡県支部発足のお知らせ……　17－15
北海道支部総会のお知らせ・常任理事会報告
……　16－17

愛鳥のつどい

第20回　全国鳥獣保護実績発表大会記録

昭和61年3月



環境庁・(財)日本鳥類保護連盟

愛鳥のつどい

第20回 全国鳥獣保護実績発表大会記録

目　次

はじめに…… 3

環境庁長官賞

神奈川県秦野市立南が丘小学校…… 4

文部大臣奨励賞

愛知県豊田市立滝脇小学校…… 6

静岡県立三ヶ日高等学校…… 8

林野庁長官賞

東京都五日市町立戸倉小学校…… 10

愛媛県城川町立城川東中学校(城川東緑の少年団) 12

環境庁自然保護局長賞

北海道羽幌町立天売小学校…… 14

滋賀県山東町立大東中学校…… 16

日本鳥類保護連盟会長賞

宮城県仙台市立中野小学校…… 18

日本鳥類保護連盟会長褒状

奈良県川上村立川上中学校…… 20

第20回全国鳥獣保護実績発表大会

(1985、12、18)写真記録 …… 22

はじめに

昭和41年より始まった「全国鳥獣保護実績発表大会・愛鳥のつどい」は、今回で第20回。いよいよこの大会も成人式を迎えました。

この行事は、全国の小学校・中学校の愛鳥モデル校をはじめ、一般団体（高等学校のクラブ活動や社会人）などが、野鳥に親しむ活動を通じて自然や野鳥の調査などを行い、自然愛護の精神を養うとともに、どのような鳥獣保護に関する実績を残したのかを発表する場であります。

大会に出場するためには、47都道府県の鳥獣行政担当課と教育委員会によって、数多くの学校や団体の中から審査され代表として選ばれなければなりません。各都道府県知事から推せんされた学校及び団体の審査資料は、㈶日本鳥類保護連盟に集まり、本大会の主催である環境庁・㈶日本鳥類保護連盟、後援者である文部省・林野庁と、そして日本鳥学会、㈶山階鳥類研究所、愛鳥教育研究会の協力を得て、厳正な書類審査が行われ、大会への出場校９校が決定されました。

発表大会は12月18日、環境庁・講堂において多数の関係者並びに見学者が集まった中で開催され、出場校の発表が行われました。発表終了後直ちに審査が行われ、各賞の受賞校が決定されるとともに表彰式が行われました。

ここに収録されている発表内容の要旨は、各発表校から提出された資料内容をもとに、㈶日本鳥類保護連盟が環境庁から委託を受けてまとめたものです。この報告書が、今後、学校における愛鳥教育活動や愛鳥思想普及活動の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この大会に参加された各出場校や御見学の皆様、関係者の方々に改めて厚くお礼申し上げます。

財団法人 日本鳥類保護連盟

環境庁長官賞

「南が丘を野鳥の楽園に」

神奈川県秦野市立南が丘小学校

1．学区の概要

南が丘小学校は、山林が開発されて建てられた学校で、秦野市南部の小高い丘の上にあります。団地と隣接していますが、回りには林や草地などがあり、比較的自然に恵まれています。開発される前にはたくさんの野鳥がいたといわれるこの南が丘に、また野鳥をよびもどしたいと開校当初より考えていました。

昭和58年度に市の愛鳥モデル校の指定を受けたのを契機に、南が丘を野鳥の楽園にしようと活発な活動を始めました。そして本校では愛鳥活動を通して身のまわりの野鳥を知り、親しみ、護ろうとする心を育み、ひいては自然愛護の心を培い、豊かな心情を養うことをねらいとして全校で取り組んでいます。

2．本校の愛鳥活動

(1)親しむ活動

①探鳥会　毎週水曜日の昼休みに愛鳥委員会が主催する探鳥会が行われています。林コース、遊水池コース、草原コースの３つに分けて低・中・高学年別に行っています。探鳥会で見られた野鳥は大きな黒板に書いて全校児童に知らせています。

この他にもぬり絵や視写、スライドやビデオを使って学習会を行いクラス毎の探鳥会も行われています。

②児童集会　今年度の愛鳥週間にはカード取り集会を行いました。カードは各クラスの手作りで、１ｍほどのダンボールに鳥の絵札とその鳥の説明を書いた字札を作って使いました。これは全校児童にその鳥の特徴をわかってもらうために愛鳥委員会が企画したものです。

(2)調べる活動

①南が丘の野鳥調査　探鳥会での記録を基に１年間に見られた鳥についてまとめたところ28科69種でした。これは当初想像していた数をはるかに上回る数でした。この調査から南が丘の自然環境を考えると、メジロ、イカル、エナガ、コゲラなど良い環境にいる鳥が常時見られるという点から、かなり自然に恵まれた所であるといえます。今後、団地の開発が進むに従い、その環境がどのように変化していくか、愛鳥活動を通して調査していきながら、現在の環境を維持できるような策をも考えていきたいと思います。

②遊水池の水鳥調査　学校の近くに雨水対策として作られた池（広さ６ヘクタール深さ50センチ）があるのですが、その池がいつしか野鳥の集まる池となり、冬にはカルガモ、マガモ、コガモ等が訪れるようになったので、その飛来数を調査しました。カルガモは留鳥ですが、５月まで池におり、夏の間はいなくなり、９月に再びもどって来ました。個体数はあまり増えず多い日でも20羽前後でした。マガモは10月20日に初めて訪れ、11月12月には140羽を越える日もありました。コガモは11月５日に初めて訪れ、多い日で40羽前後でした。12月はピークになり３種類のカモを合わせて200羽近くになる日もありました。その後、12月から１月にかけて池が凍結し始めてからカモの数はぐっと少なくなり、全面凍結した日に１羽も見られなくなりました。凍結しない日でもカモの来ない日が続きましたが、２月３月と再び徐々に来るようになりました。

③給餌活動を通して　クラス毎に作った給餌台を使ってそれぞれ課題を設けて調査を行いました。２つほど紹介します。

★鳥はどんなものを飲むか（６年）

水・みかん・コーラ・サイダー・さとう水・しお水・酢・しょう油・ケチャップ・ソース・サラダ油・リンゴ・みそ汁を置いて調べたところ・印の甘いものを好むことがわかり、鳥のなかでもメジロがよくきた。

★給餌台によく来る鳥は（４年）

11月から２月の調査で１位スズメ、２位ヒヨドリ、３位メジロ、４位ムクドリ、５位シジュウカラ、６位カワラヒワの順だった。

(3)護る活動

①巣箱かけ　夏に巣箱作り講習会を開催し、11月末にその巣箱を南が丘の林を中心につけました。前年度は巣箱の穴が大きめだったり、場所が接近しすぎていたりといった点で、鳥の巣箱の利用度が少なくなったのではないかという反省が出されたのでそれらの点を改善し向きや高さをいろいろ考えて設置しました。

②給餌活動　愛鳥委員会より冬には給餌活動をしようと、野鳥だよりや朝会を通して呼びかけ、鳥の餌集めが始められました。当初愛鳥委員会を中心に行う予定でしたが、秋になり全校をあげて取り組もうということで各クラスがそれぞれ工夫して給餌台を作り、給餌活動を行うことになりました。

給餌台は、ありあわせの木や竹などを利用し、クラスの子どもと先生が一緒になって作り上げました。

できた給餌台は各クラスで好きな場所に設置しました。ただし、低・中学年は校内に、高学年は校外（学校の回りの緑地）に設置してもよいことを決めておき、クラス独自で給餌方法を考え、係を作ったり班毎に順番で給餌したり、給餌台の近くを通る子が給餌したりといった具合に活動を開始しました。そして、その結果を校内愛鳥発表会を開いて発表し合いました。

(4)広げる活動

①野鳥観察小屋作り　みんなの自然への関心を高めようと児童会の提案「みんなで空き缶を集めて野鳥の観察小屋を作ろう」を受けて全校で取り組みました。空き缶を集めることによって、観察小屋作りの資金にし、また資源回収にも役立ち、物を大切にするという精神面も培え、なによりもみんなで協力して一つの事を成し遂げる素晴らしさを体験させたいと考えました。製作は6年の児童を中心に、父母や地域住民の協力を得て行いました。

その回りには丸太積みや水飲み場、カントリーヘッジも作りました。

②文通　愛鳥活動を行っている他の学校との交流を深めたいと考え、石垣島の大本小学校や中華人民共和国の奉天の小学校と文通を始めました。この辺では見られないリュウキュウキンバトやリュウキュウアカショウビンの鮮やかな色に驚き、愛

鳥の鐘を鳴らしてみんなで鳥を見ているなどという方法に感心しました。文通によって更に野鳥への関心も深まりました。

③野鳥だより　「こんな鳥見たよ」箱を置き、登下校中や遊んでいる時に見た鳥を知らせるようにし、それらのニュースを「野鳥だより」にのせ全家庭に配布しています。構成は野鳥に関するニュース、こんな鳥見たよ、家庭からの通信等で、月1回をめやすにして発行しています。子どもたちからは実に多くの情報が寄せられ、月1回の発行では間に合わないような現状です。

④遊水池がなくなる　「この遊水池は計画の上では埋め立ててテニスコートなどにする予定です。」これは子どもたちが池の周りに看板をかけさせてほしいとお願いに行ったときに聞いたことでした。

今秦野市で200羽ものカモが羽を休める池は他にありません。すぐそばに震生湖もありますが、観光地のため人の出入りが多いので、カモ達は南が丘までやってきて安心して休んでいます。スポーツ施設ができることも嬉しいことですが、秦野市唯一のカモの休める池がなくなってしまうことを考えると、その方がずっと残念なことだと思いました。

地域の方々も野鳥だよりや早朝探鳥会を通じて、池を残したいという思いが高まってきて野鳥だよりの通信欄にも意見が寄せられました。そんな時、南が丘小の愛鳥活動についての記事が新聞にものりました。そして、ついに多くの人々の願いが公団側にも伝わり、池は残されることになりました。

私たちが愛鳥活動を続けていくのに、この遊水池が残されることになったということは大きな励みになりました。自然は自らの手で守っていかなければならないことをつくづく感じ、また、地域の人々と心が通い合うことの素晴らしさにも感動しました。そして、鳥を見たり護ったりしながら多くのことを学べることにも気づきました。

最後に、これからもこの遊水池を含めて南が丘を野鳥の楽園とするために地域の人たちと共に一丸となって愛鳥活動を続けていきたいと思います。

文部大臣奨励賞

「わたしたちの愛鳥活動 知って守って広げる活動」

愛知県豊田市立滝脇小学校

1．学校の概況

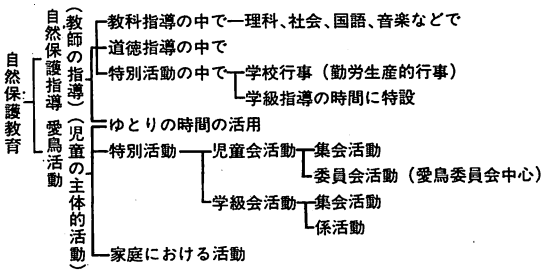
本校は、豊田市の南東端に位置し、周囲は緑の山々に囲まれた静かなところにある。学校周辺の山林は、県で指定された鳥獣保護区になっていて、鳥獣の種類と個体数が多く、大変恵まれた環境にある。この恵まれた自然環境を教育に生かそうと、愛鳥活動を15年ほど前から継続して進めている。

2．本校の自然保護教育

(1)自然保護教育のねらい

本校では、愛鳥活動を通して児童の自主的な活動を促し、自主性のとぼしい僻地の児童の自主性と主体性を伸ばし、また、この活動の中で野鳥に対する愛情を育て、さらに、人に対するやさしさ、豊かな心を育成することと自然愛護の能力と態度を身につけることをねらいとしている。

(2)自然保護教育の位置づけと組織



(3)愛鳥活動の内容と活動

本校では愛鳥活動を次の三分野としている。

「知る活動」　野鳥を知る活動で愛鳥活動の基礎となる活動。

「守る活動」　直接的、間接的に野鳥を保護する活動で愛鳥活動の中軸。

「広げる活動」　家庭、地域へ保護活動を啓蒙。

これらの活動は児童会が立案実践している。

ア．知る活動

（ア）個々の児童による「知る活動」

①フェンスの絵やシルエットから　正門のフェンスには野鳥の絵、校舎前の防球ネットには野鳥のシルエットがトタン板で作られている。

②昇降口の愛鳥コーナーの活用　野鳥観察記録板、野鳥の標本（27種）野鳥の写真・図鑑、野鳥のさえずりを聞くシンクロファックスなどを児童がいつも出入りする昇降口に設置している。

③1人1鳥研究　本校では、担任の指導によって、ゆとりの時間を使い1人1鳥研究を推進している。児童一人ひとりが好きな野鳥を決め、自分の鳥として形・色や模様、鳴き方、食性などについて詳しく調べている。そして、それを愛鳥の会で発表させ、意欲化を図っている。

④のぞき窓からの野鳥の観察　校舎の裏庭には、餌台が5個設置されており、訪れる野鳥を廊下ののぞき穴（プラスチック板に小さな穴をあけ、ガラス戸に取り付けたもの）から手にとるように観察でき、野鳥の特徴や動き等細かく調べている。

（イ）各委員会の活動

①愛鳥活動の計画立案（愛鳥委員会）　月1回の愛鳥集会、年1回の愛鳥の会、探鳥会等の計画を立案し、児童会が実施する。

②登下校の野鳥観察の資料整理（愛鳥委員会）毎日、登下校時に通学班で野鳥の観察を行っている。観察された野鳥は昇降口の記録板に記録される。

③野鳥の去来調査（愛鳥委員会）　毎日の観察を参考にし、特にえさ台に訪れる野鳥の去来を調べている。

④野鳥のさえずり放送や野鳥の紹介（放送委員会）　児童の登校時に毎日テープで野鳥のさえずりを放送している。また、給食時には、初見の野鳥や初鳴きの紹介などを実施している。

⑤バードコーナー・愛鳥コーナーの整備（図書委員会）　図書室の一角にバードコーナーを設け、野鳥に関する本、図鑑、その他資料をおいている。

（ウ）児童会の計画による活動

①探鳥会の実施　毎月、全校で1回、学級で1回、計2回、ゆとりの時間を活用して探鳥会を実施している。方法、場所、観察の観点など愛鳥委員会

の提案を児童会で話し合わせ、実施している。また、全校の児童が双眼鏡を持ち、観察することができるので、すべての子が嬉々として熱心に観察している。

②愛鳥集会、愛鳥の会の実施　毎月１回、全校で愛鳥集会を開催。内容は、野鳥賛歌など鳥に関する歌、月別の観察野鳥の集計結果、最近の野鳥情報などを愛鳥委員会の児童が中心で実施している。また、年１回、バードウィークに愛鳥の会を実施している。本年度は、野鳥に関する研究発表、鳥にちなんだ劇、鳴き声で鳥名をあてるクイズが実施された。

イ．守る活動

愛鳥活動の中軸として本校では最も重要視している活動である。この活動も愛鳥委員会の立案により児童会で話し合い実施している。

①巣箱の製作・架設・管理巣箱の製作・架設・管理は６年生が担当、本年は、40個の巣箱のうち、19個にヤマガラが営巣した。営巣中の巣箱の１つがイタチに襲われ、その対策が児童の間でもちあがり、児童会で話し合われた。

②えさ台の設置と給餌活動　現在、校内には19のえさ台が設置されている。冬の間、愛鳥委員会の世話で５年生が中心となり、通学班で給餌を行っている。主に13種の野鳥が訪れ、時にはリスの訪問もある。

③給餌台用のえさの確保とえさ木の植栽　給餌活動に必要なえさづくりやえさ集めを計画的に行っている。木の実集めを１年生が、ヒマワリの栽培を２、３年生が。実のなる木の挿し木を４年生が実施している。

ウ．広げる活動

野鳥保護の活動は、自分たちが学校の中だけでやるのでは成果があがらないという提案があり、児童会で話し合い、地域にも広げていくことに力を入れていくことになった。

①愛鳥活動の啓蒙　愛鳥通信「ヤマセミ」を発行。児童会での活動や家庭での様子など情報や意見の交換、資料の提供等を行っている。また、遠足や校外学習などに出かける時には必ず、巣箱の架設と愛鳥・自然愛護の標語板を取りつけている。

②親子による巣箱の架設　今年は９月の両親学級に親子でヤマガラ、シジュウカラ用の巣箱を作り、

各家庭近くの山林にかけた。大変好評であった。

③家庭における給餌活動　冬季は親子での給餌活動が恒例化しつつある。野鳥を仲介として親子のふれあいは、一段と深い心の交流を醸成しつつある。

(4)自然保護の指導

本校では、自然愛護の心情を育て、野鳥の理解を深めると同時に保護のために必要な知識、技能を身につけさせようと教育課程に位置づけて指導している。

(5)愛鳥活動に関する施設・設備の充実

野鳥への関心を高めたり、理解を深めたり、直接、野鳥保護に結びつくような施設・設備の整備に力を入れている。

①餌木の植栽　現在、校地には野鳥の餌木が500本余り植栽されているが、今後さらにふやしていきたい。

②野鳥の庭　校庭の一角に野鳥の庭が設置されている。そこには水飲み場、水浴び場、えさ台等があり、野鳥がよく訪れる。学校全体を野鳥の庭にする構想で進めている。

③野鳥の森　一昨年、学校裏山に卒業生や地区の後援会の奉仕によって探鳥の道、餌木の森が設けられた。現在、ここで探鳥会を行っている。

④器具、備品の整備　愛鳥に関する指導が有効、適切に進められるよう器具、備品、資料の充実を図っている。

３．今後の計画

今までの愛鳥活動の実践をふり返り、今後更に前進させるために次の点等に力を入れたい。

①児童の保護活動への取り組みを一層自主的にするために有機的、総合的な全体計画を作成し、自主活動の場を確保したい。

②家庭、地域との連携を深め、自然保護が無意識の中で実践できるまでに高めたい。

③他校との交流を図りたい。

文部大臣奨励賞

「ヤマガラの生態観察を中心として」

静岡県立三ヶ日高等学校

1．はじめに

私達の高校は静岡県の西部の浜名湖を南に見る三ヶ日町にあります。科学部の中に野鳥班が誕生したのは、今から7年前です。設立当時は、近くの水田や湖でバードウォッチングを楽しむ程度でしたが、その内先輩達は、巣箱を利用する鳥の調査を始めました。この予備調査から、私達の町にはヤマガラという鳥が比較的多いことが判りました。また、調査のあまりされない鳥だということが判り、本格的に取り組みが開始されました。ヤマガラの調査は、先輩から後輩へと研究を受け継ぎ、6年になります。また、この間、ヤマガラのみにとどまらず、56年～58年にかけて浜名湖の行動調査、59年からは静岡県西部一帯のコサギの調査を並行して進めています。野鳥班の活動の目的は、①野鳥の生態を調査すること、②調査することで自分自身が自然のしくみを理解してゆくこと、③野鳥の実態を校内外へ発表し野鳥への関心を高めることにあります。

2．主な活動内容

(1)ヤマガラの生態調査について

調査地は静岡県引佐郡三ヶ日町の国有林で昭和55年から現在まで6年間調査しています。調査は先輩から後輩へと継続して行っています。内容は繁殖生態を中心に13テーマ35項目について調べました。今回は5テーマについて述べます。

①調査地の概要　調査の中心は、前述した静岡県西部三ヶ日町平山の51.8haの国有林です。この地域は、標高140～460m、東向きのゆるやかな山地です。樹林の75%を針葉樹が占めていますが、尾根筋を始めあちこちに広葉樹が残っています。針葉樹・広葉樹共に樹令が古く豊かなエサ場を作り、沢が林内で枝別れし、林床にはミズゴケが見られ、繁殖地としても恵まれています。

②調査方法　総て架設巣箱によって調査しました。年度別架設巣箱数は、次の表の通りです。

調査の主な項目と、調査の流れ

1　巣箱の利用条件に関する調査
　架設方向・架設巣箱の高さ・巣箱の大きさ
　架設巣箱間の距離・巣箱の穴の大きさ

2　繁殖期の行動 → 巣作り→巣材運びと巣作り・巣材の種類と量
　↓
　産　卵→一腹卵数・期間中の在巣率・夜間在巣
　↓　産卵開始日と気温
　抱　卵→期間・抱卵の日周変化と在巣率
　↓　雌雄の役割分担
　育すう→期間・給餌回数・ヒナの体重変化
　↓　抱すう・雌雄の役割分担・明るさと行動
　巣　立→巣立の様子・巣立日の条件
　↓
　家族行動→家族行動の期間・行動面積とねぐら
　→援助活動→ヤマガラとシジュウカラ・ヤマガラ同士

3　非常繁殖期の行動 → 総数調査→周年変化・季節移動・番い形成と維持
　巣箱架設地への集中化現象
　→生活領域→夏と冬の行動比較・一日の生活内容
　隣接領域について（テリトリー）

4　その他の調査 → 繁殖中の障害→ネズミ・ヘビの対策
　→生活サイクル
　→ヤマガラの音声

平山調査地	
スギ(人工林)	50%
ヒノキ	20%
アカマツ	5%
広葉樹	25%

年	81	82	83	84	85年
個	25	83	128	120	85個

定期観察／繁殖期間である3月～7月にかけ、架設した巣箱のすべてを1日～2日ごとに見まわり、変化を記録しました。

1日観察その他／ブラインドによる観察。前日にブラインドを設営し、翌日およそ5時から夕方19時頃まで、ヤマガラの様子を観察しました。その他、ロードサイドセンサス法による総数調べ、タイムマッピング法を用いた追跡調査や標識調査等で行いました。

③調査結果の要約

（ア）ヤマガラの巣箱の利用条件について　架設方向は斜面では下りの空間の大きい方向がよい。巣箱間は40m以上離すとよい。この他高さは、1～4mの実験では4mの位置、4～7mの実験では7mの位置をよく利用した。巣箱の大きさについては前板の高さが20cmのものをよく利用した。

（イ）巣作りについて　期間は13日、産座ができ、植物の冠毛が入る……それは産卵のサインだった。
（ウ）産卵期と産卵期の抱卵について　産卵開始は平均気温が12.5～13℃、１腹卵数は平均6.3 個だった。産卵数の増加に伴って抱卵率が増加した。このことが孵化日の同日性を作ると思われる。
（エ）抱卵・育すう期の雌雄の役割分担　抱卵は雌が100％、抱すうも雌が100％、ヒナへの給餌は、雌雄50％ずつ分担していた。
（オ）夏と冬の行動比較　冬は気温が３℃以上で行動を始め、夏は、24～25℃になると活動量は低下した。生活場所は、冬は樹冠部が多く、夏は広葉樹下が多かった。冬の行動時間は４時間、夏は14時間程だった。

ヤマガラのテリトリーは、年間を通じて明確なものは見いだせなかった。

(2)カモの調査について

56年以来、浜名湖松見ヶ浦保護区を中心にカモの行動を調査しました。

種別周年変化・１日の行動パターン等８テーマ調査しました。特に保護区とエサ場のくい違いが明確になり、保護区の定め方の難しさを知りました。

(3)サギの調査について

59年秋から、コサギの分布と行動について調査を始めています。これまでに静岡県西部で３ヶ所のコロニー、23ヶ所の冬塒を発見しました。以後、塒を中心としたコサギの生態について、調査を継続したいと思っています。

3. 野鳥への関心を高めるための活動

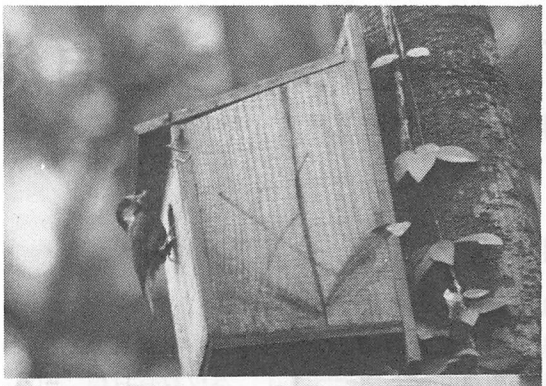
(1)学校祭で１年間調査した野鳥の生態について

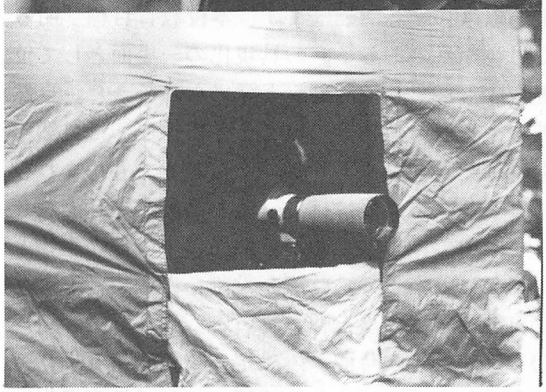
グラフ、図、表等を使い展示発表します。(9月)

内容の主なものは、①夏休みの行事として、他県の小鳥の森を訪ずれた様子を紹介します。②野鳥入門コーナーを設け、バードウォッチングの手ほどきをします。③展示会場には必ず説明者を置き、訪れる地域の小・中学生や父母に対して要点説明等を行います。

(2)校内優秀文化クラブ発表会で

全校生徒を対象に野鳥の調査結果を発表しています。本校には16の文化部があり、学校祭（展示）とは異なった動きのある発表会（スライドや実演)を行い、予選審査の結果上位３クラブが全校発





表を行っています。野鳥班は、毎年これに選ばれ、これまでにヤマガラやカモ等の発表をして来ました。

(3)生徒理科研究発表会への参加

調査結果をまとめ、県理科教育研究会主催の発表会に参加します。西部予選、県大会と続き、57年・58年・59年と連続３年県最優秀賞を得ることができました。これ等の結果は、県生徒理科研究論文集に収められ、県下の小・中・高の総てに配布され、活用されます。

(4)県学生科学賞に応募

県理科教育研究会主催の学生科学賞に論文をまとめ参加します。今年、「ヤマガラの生態観察」をまとめ応募した結果、県教育長賞を得ました。この結果の要約は、県生徒理科研究論文集に収められ、全県下の学校に配布されます。

私達が、対外的に発表したり、また保護の考え方をアピールする場は、ほとんどありません。上記(3)(4)は、たまたま認められそのようになったものですが、今後、(1)(2)をベースにして、よりよい調査を重ね、再度(3)(4)に臨みたいと考えております。また、地域の野鳥保護にたずさわる人々との交流を深め、地域に根ざした活動をしてゆきたいと考えています。

林野庁長官賞

「野鳥と私たちと自然と」～自然観察路づくり～

東京都五日市町立戸倉小学校

1．愛鳥活動、今までの歩み

(1)愛鳥活動の位置づけ

①教育目標との結びつき　昭和42年愛鳥モデル校指定以来、愛鳥活動はまず、本校教育目標「明るく思いやりのある子」の具現化の一場面として位置づけられ、全校活動へと深められてきた。自然破壊や密猟、植物等の根こそぎの採取・『自然のものは数限りなくあり、いくらとってもかまわない。』という自然観に抗し、愛鳥活動を通し実践していく中で、子供たちが自然界の中の他の生物と同格のヒトとしての認識と役割を考えていくような自然観を持つ事を願っている。

②「はばたきの時間」の設定　昭和55年度より、愛鳥活動を「はばたきの時間」として教育課程に位置づけ、活動を始めた。週１単位時間、月３単位時間で、土曜日の１校時に実施され、児童の愛鳥活動時間が授業時程内に保障された。またこれに伴い、愛鳥活動の年間カリキュラムが学年別につくられた。

(2)愛鳥活動の実際

本校の愛鳥活動は、大きく「保護活動」と「観察学習」の２つに分けられ、かみ合って進められてきている。

①主な保護活動　。巣箱づくり、巣箱かけ。愛鳥講座（外部講師を招いて、野鳥に関する認識を深める）。愛鳥ポスターの募集（児童会）。探鳥会。冬期の給餌活動。野鳥誘致園の清掃管理（昭和47年に地域の人々の協力で完成）。実のなる木の植栽。傷病鳥獣の直接保護。はばたきの部屋の利用、管理。野鳥相談室、展示コーナーの開設。自然観察路づくり

②主な観察学習　。巣箱の架設条件。野鳥の色に対する反応について。戸倉地区の野鳥の分布について。シジュウカラの食性について。ツバメの巣作りと育すうについて。キセキレイのひなに与える餌の量について等が従来行われてきた。今年度は線センサス法を用いて戸倉地区の野鳥分布、数等について基礎データを集めている。その他、野鳥をテーマとした自由研究が行われている。

③各学年のねらい、とりくみ　大まかに述べると１・２年は野鳥に接し自然に親しむ活動。３・４年は野鳥等の観察をし自然を知る活動。５・６年は野鳥を中心とした自然を守る活動を行うよう努めている。

愛鳥週間には、１年生はクラスの鳥をツバメ・ウグイス・カケス・キジ・シジュウカラと決めて絵を描き、２年生はツバメをクラスの鳥と決め教室にツバメの絵の切り抜きや各家にある巣箱（１年生の時に６年生から贈られる）の観察をした。３年生は愛鳥コーナーを作成しポスターや登下校時に見た鳥をはったり、その日見た鳥で愛鳥おみくじをつくって楽しんだ。４年生は自分の好きな鳥を決め、絵を描いたり、餌台をつくったりし、５・６年は愛鳥すごろくやカルタをつくったり、愛鳥ベストテンなどを決めたりした。また水場や餌台をつくったりした。

冬期になると給食の残りや、夏の間集めておいたヒマワリの種子等をもちより、給餌活動が行われる。

また本年度行われた展覧会では、５・６年の巣箱や餌台を置き、そこに自分達の鳥のやきものを飾り、鳥の声をテープで流した〝ミニ・サンクチュアリ〟は好評であった。

「はばたきの時間」には、各学年様々なコースでの探鳥会等が実施されている。６年生が１年生といっしょに野外にくり出し、鳥の識別やフィールドマナー、双眼鏡の使い方などを教えたりもする。

④野鳥保護委員会の活動　委員会独自の活動と全校に情報提供やイベントを行う活動をしている。。探鳥会（毎金曜、朝６時45～８時15分に実施、翌日のはばたきの時間の探鳥会の為にコースや観察できる鳥等の情報を伝えたり、線センサス調査も行っている）。早朝探鳥会（年１回、５～６月の早朝４時～６時）。野鳥誘致園の清掃、管理

◦給餌活動の推進◦巣箱の架設、修理、清掃◦傷ついた鳥の保護◦１分間探鳥会（毎月曜朝礼時校庭で１分間耳をすまし、見たり聞いたりした鳥を発表し合う）◦愛鳥だよりの発行（月１回ぐらいのペースで委員会の児童がつくっている）

また今年度より校舎新築に伴い「はばたきの部屋」がつくられ、委員会の児童が日常的に集まり活動しはじめた。この部屋を利用した「野鳥相談室」が毎週水曜日の休憩時間に開かれ、野鳥クイズ等様々な企画で大盛況を博している。

日常的にもこの部屋で鳥の羽毛等全校から寄せられた物の展示が行われ、さらに鳥を中心とした自然関係の本も集められ、図書室とは別に貸し出されている。

２．自然観察路づくり

自然破壊が地球的規模で広がり続けている今日、我々人類の自然保護に根ざした自然観の確立は重大な意味を持っている。子供のみならず、より広く地域の人々への自然保護思想の普及を目差し、昨年より従来の愛鳥活動を基礎として「自然観察路」をつくりはじめた。

昭和58年に当時５年生がクラス内で自然観察オリエンテーリングを時々やり楽しんでいた。そこで自分達の住んでいる自然の再発見、認識をし、翌59年には６年生が観察ポイントにそれぞれ解説者として立ち、全校によびかけての自然観察オリエンテーリングを実施し、自然観察路をつくろうという事になった。そして卒業制作として60年３月に第１号路西戸倉コースが完成した。

この西戸倉コースは、通学路につくられているが、それは見続ける事ができ、また地域の人々もよく通る所で、より多くの人々に利用できる所であったからである。

コースの観察ポイントには掲示板が常設され、季節ごと、最近では月ごとに違った解説が質問やクイズ形式で取り付けられている。

ＰＴＡ会長を中心とし、この観察路の意義、目的等について地域をまわった事により二次的ではあるが自然保護思想普及にも一役かった。

西戸倉コースを完成させた子供たちが卒業した今年度は、〝自然観察路プロジェクトチーム募集〟という事からはじまり58名もの子供達が集まってくれた。（全校児童数96人）、目下、５・６年を

中心としてこのプロジェクトチームで自然観察路づくりが行われている。

西戸倉コースの毎月の観察ポイントでの問題づくり、その問題を掲示用のプラスチック板にイラスト入りで描く作業、また問題の解説をしたパンフレットづくり等を行っている。

また西戸倉コースを利用して、６年生が各観察ポイントで解説員となり、全校自然観察オリエンテーリングも行われている。各学年ごと４～５人の小グループにわかれ、メモ用紙を手に観察ポイントを自由にまわる。全長約1.7キロメートルのコースには木でつくられた掲示板にそれぞれ観察ポイントを示す問題がとりつけられ、そこに１人ずつ６年の解説指導員が立っている。問題は例えば、「どうしてこの木は片側に枝がないのでしょうか。」、「ここから見えるけしきは10年後どうなるでしょう。」等である。この観察ポイントは19箇所ある。この自然観察オリエンテーリングは解説する６年生にも参加する児童にも人気が高い。

３．今後の方針

20年近く行われてきた愛鳥活動を基本として踏まえ、今後、自然観察路の充実をはかっていきたい。自然保護思想の浸透を目差して、さらにコースを増やしたり（現在ゲンザスコース整備中、城山コース、坂沢コースは観察ポイント調査中）解説やパンフレットの充実をはかりたい。またイラストマップや「戸倉の自然」等の小冊子もつくる予定である。

学校をビジターセンターの１つとし、将来的には、五日市町全域にコースをつくり、町の郷土館などを中心にビジターセンターをつくり、また駅や観光案内所等にも働きかけ、町全体に広めていきたい。

夏の秋川を中心としたキャンプ、釣り等の汚される観光の町から、自然に解れ、親しむ新しい自然観察の楽しみ方のある町へと変わっていったらと願ったりもするのである。

林野庁長官賞

「緑の少年団活動と野鳥保護」

愛媛県城川町立城川東中学校

1．町の概況

城川町は、高知県に隣接する山岳地帯の人口6000人余りの町です。町内には致る所に花が咲きみだれるとても環境の美しい町です。四国の西南部に位置しているので、夏は暖かく、雨量も多く、特に6・7月の梅雨の頃と9月頃、雨が多い。冬になると、大陸からの季節風が関門海峡付近を通って吹きこむため、山陰地方のようなくもりの日が多くなり、雪は瀬戸内海沿岸の地域に比べて多い。

町の山林の占める割合は81.7%に達しますが、田畑は12.5%に過ぎないので、山林に頼る度合が大きい町です。ヒノキは著しく増加しましたが、クヌギなどの木の実のなる雑木の減少が目立っており、鳥たちの住み家も少なくなってきています。

2．町の生物

ウド採り、秋の山芋掘りなどの楽しみがあります。イノシシは激減していますが、タヌキ、アナグマ、ムササビ、リス、イタチ、モグラ、コウモリ、野ウサギ等が多くいます。ただし、野ウサギについては天敵としてキツネを要所に放しています。そのキツネが小鳥達も結果的には殺しているようです。

ミソサザイ、ウグイス、ホオジロ、ヤマガラ、セキレイ、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、キジ、ヤマドリ等は年中町に住んでいます。

ホトトギスは南方から渡ってきて産卵する夏鳥ですが、その鳴き声は昼も夜も静かな山あいにこだまします。夏鳥にはホトトギスの他、ツバメ、アオバズク、カッコウなどがいます。冬鳥としてツグミ、マヒワなどがいます。狩猟鳥のコジュケイは最近急にふえていますが、昨年はあまり道ばたなどでは出合いませんでした。ヤマドリは変わりませんが、キジ、カモなどは減っています。クヌギ林には甲虫などが多く、エノキには国蝶オオムラサキも生息しています。

3．学校の愛鳥活動

私達の学校は、昭和36年に高川中学校と土居中学校とが統合してできた学校です。開校当初の生徒数は503名でしたが、年を追うごとに減少して、現在はわずか95名の小さな学校になりました。

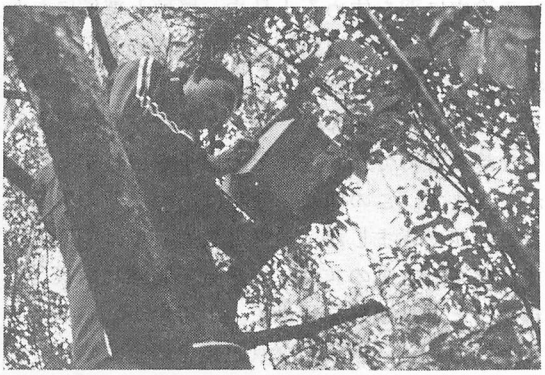
私達の学校には「緑の少年団」があります。これは昭和55年に結成された組織で、以来、役場の産業課の指導も受けながら活動しています。今年は、1年生28名、2年生32名計60名の団員です。緑の少年団の活動目的は、「緑豊かな住みよいふるさとづくりの一環として、郷土を愛し自然と親しむ心豊かな生徒になる」ということです。学校の愛鳥活動は、この緑の少年団の活動の一つとして展開されています。

4．緑の少年団の活動

緑の少年団の活動は、一日林業研修（1・2年生全員参加）、校内の樹木の剪定、県植樹祭参加、巣箱かけ（年2回）、校外奉仕作業（年3回）、巣箱の見回り、学校花木園作業、1年生の入団式、巣箱作り、町有林植樹、学校林植樹、下刈り、学校林の巡回、うちこみで間伐材を出す、緑の少年団交流会参加などです。今年は、3年生が親子で学校林の間伐やうちこみで間伐材を出す活動をしましたが、この時にも巣箱を10個かけました。次にこれらの中から幾つかを選び具体的に説明します。

まずは巣箱かけです。これは、巣箱つくりから始めます。生徒一人一人が板を1枚ずつもらって作ります。どんな巣箱にするかで入る鳥の種類が違ったりするので、各自がいろいろな鳥を想像して思い思いの巣箱をつくります。寸法を間違えたりしながらも、巣箱に鳥が入ってくる時のことを考えてみんな一所懸命につくります。毎年、年間40個ほどの巣箱を作り、年2回、遠足の時などに巣箱かけを行います。巣箱の屋根に少しでも目立つように柿の熟したのを置いたところ、何日か後

に巣箱の中から１羽の小鳥が出てきたのを確認した例もあります。巣箱かけをした次の年の春に追跡調査を行い、各自が自分の巣箱を見に行きます。その中の一つにムササビまで入っていたことがありました。近頃はこの辺でも雑木林が減ってきているので巣づくりが難しくなってきているのだろうと思われます。ですから巣箱かけは大切な活動です。



学校林の植樹は、二人一組となって行います。一人がくわを持ち、もう一人が植木を持って険しい山道を登っていきます。学校林に着くと、しばらくの間、林業についての話があり、森林の役目やその利用についての説明を受けます。それから植樹に入ります。服や靴や顔はみんな泥まみれになりますが、少し木が大きくなった頃には、小鳥たちのいい遊び場になっていることを思い、１本１本丁寧に植えていきます。植え終った時には誰もが満足感でいっぱいになります。

その他の活動では、愛鳥週間のポスターつくりと標語つくりをしました。ポスターは、各自が図鑑などで鳥について調べながらいろいろと工夫して描きます。描いているうちに野鳥に関する考

えも深まり、その結果としてそれぞれのポスターもよい作品に仕上がりました。その中から良いものを校内外に掲示したりコンクールに出品したりしました。コンクールでは３人の人が入選という良い成績を修めることができましたが、私達の描いたポスターが野鳥保護に役立ってうれしく思いました。

標語づくりも全校で取り組みましたが、いろいろとよい標語が集まりました。

その他には、国際森林年記年フェスティバルや県森林公園での植樹祭に参加したりしました。

また一部ですが、家族で愛鳥週間について話し合い、庭に木や花を植えることも実施しました。

５．おわりに

私達が緑の少年団の活動を通して感じたことは、自然が大切なものだということ、そしてその自然に生育する野鳥やその他の動植物が大切な役割を持っているということです。鳥たちが空を飛んでいるのどかな城川町、この光景をなくさないためにも、少しでも自然をこわさないよう、私達の郷土が今後何十年経っても今のままの自然を保ち続けるように、私達は野鳥保護についてより深く考えてみるべきだと思います。今後はさらに緑の少年団活動を活発にし、野鳥や自然を保護するために学校と地域で協力して立派な活動を進めるとともに、その活動を通して身につけたことをこれからの生き方の中で生かして行きたいと思います。

環境庁自然保護局長賞

「鳥たちの楽園をいつまでも」

北海道羽幌町立天売小学校

1．天売島の概況

私達の住んでいる天売島は、北海道の日本海側に浮かぶ周囲12kmほどの小さな島です。人口は約650人で、実は人の数よりももっと多くの海鳥たちが住んでいます。オロロン鳥で有名なウミガラス、ウミネコ、ウトウ、ケイマフリなど、8種類もの海鳥たちが繁殖し、島全体が天然記念物にも指定されています。そればかりではなく、春と秋にはたくさんの渡り鳥が羽を休め、この4年間で170種を越える鳥が観察されました。その中には、ヤツガシラやツメナガホオジロなどのたいへん珍しい種も含まれています。また、冬には数多くのワシタカ類が越冬します。このように天売島は四季を通じて鳥たちの楽園になっています。

2．野鳥の観察

私達が天売小学校で野鳥観察を始めたのは、今から4年前のことです。その頃の私達は、島で繁殖する海鳥の正式な名前も知らず、その繁殖地に足を運ぶこともありませんでした。しかし、野鳥ばかりではなく身の回りの鳥の名前も覚えるようになり、鳥に対する興味も少しずつ高まってきました。また、鳥についてだけではなく、私達の目は自然と郷土天売島へ向くようになり、この島をこれからどうしていったらよいのか、この地にしかない自然をどのように守っていったらよいのかなど、真剣に考えるようになりました。このように、野鳥観察がきっかけとなって、自分たちが住む島を心から大切にする気持ちが生まれてきたのです。

3．愛鳥活動 ―学校行事を中心に―

次に現在実際に行っている活動の中から、学校や学級で行われている行事について月を追って紹介します。

(1)5月といえば1年間のうちで最も多くの鳥が渡来している時期ですが、ちょうどその頃学級では「春の鳥調査」、学校全体では「春の遠足」、「野鳥教室」が行われます。「春の鳥調査」は、主に渡りの途中に羽を休める小鳥や、繁殖と準備にかかった夏鳥を中心に観察します。「春の遠足」は3年生以上が島を1周し、海鳥を観察します。ウミネコはちょうど産卵の、またケイマフリは最も活発な時期なので、間近にその様子を観察することができます。この他に、今年はハヤブサの巣を見ることができました。「野鳥教室」では、天売島で観察される鳥のスライドを見て勉強した後、巣箱かけと野鳥観察をします。1年生から6年生までが協力し合い、みんな双眼鏡をのぞくのに一生懸命です。

(2)夏休み後には「自由研究発表会」という行事があります。鳥の生態や形態など、鳥をテーマにしたものがたいへん多くなっています。

(3)9月になると「秋の渡り鳥調査」があります。内容的には「春の鳥調査」とほとんど同じです。

(4)11月には、全校で「鳥の絵コンクール」が開かれます。1年生から6年生までが自分の好きな鳥の絵をかき、作品は廊下に展示されます。私達はふだん鳥をよく見ているつもりでもいざ描いてみると足などがとても難しく、また、鳥の細かい部分もよく見なければならないので、よい作品をかこうと思うとたいへん苦労します。しかし、賞をもらった時にはとてもうれしく励みになります。

(5)冬休みの後にも「自由研究発表会」があります。風が強く寒さのきびしい2月に「スキー遠足」があります。急な坂を登るなどして約7～8kmは歩きますから、とてもつらく苦しい時もあります。しかし、夏の間とは全くちがった風景を見ることができますし、新しい発見も数多くあります。2年前に、全員が幻の鳥シロフクロウを見ました。また、去年はトドの群を発見しました。このようなきびしい自然の中での新しい発見から、言葉では言い表せない強い感動を受けました。

以上のように、天売小学校では鳥について、よく観察しよく知ることを中心に一年間の行事を行

っています。

4．野鳥クラブ活動 ―ボランティア活動―

行事とは別に、野鳥クラブの活動、そしてボランティア活動も行われています。

(1)野鳥クラブは１年間を通して毎週火曜日の６時間目に活動しています。人数は現在７名で、観察を中心に行っています。雨などで外へ出られない時はスライドを見たり、現在見られる鳥やクラブでのできごとを記事にした壁新聞や愛鳥ポスターなどを作り、校内に掲示しています。

(2)ボランティア活動では、主に島内美化運動を行っています。島の野鳥たちが住みやすいように、また、美しい自然を見に来た観光客が気持ちよく島めぐりができるように、島内のごみや空かんを拾っています。

5．日常的な取りくみ

その他日常的に取り組んでいる活動は、次のようなものです。

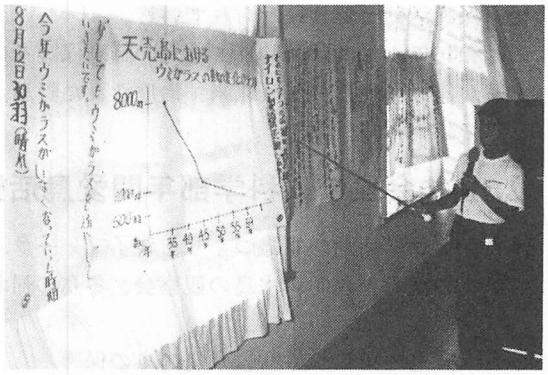
(1)最も中心になるのは、やはり観察です。登下校時も野鳥観察のよい機会になりますし、土曜日や日曜日などに友達とよく鳥を観察しに出かけたりもします。観察された鳥は朝の会で発表したりします。また、見た鳥を模造紙に記録することを三年間続けることによって年による渡りの変化の様子を知ることができました。

(2)渡りの途中で傷ついたりした鳥を保護したことが何度もあります。７月の初めに、フクロウ類の飛べない雛を植林の仕事で天売島に来ていた人が、たまたま発見しました。私達はそれを学校で飼い、生肉を与えたり、飛ぶ練習をさせたりして一時保護しましたが、夏のある日開いていた窓から自ら野生に帰っていきました。また、北海道にはいないはずの弱ったゴイサギの幼鳥を保護し、魚の刺し身などを食べさせて元気に飛び立たすこともできました。保護しても死んでしまう鳥もいますが、こうして元気に飛び立つ姿を見た時は、とてもうれしいものです。

(3)マムシの駆除のために島に放鳥されているコウライキジ用のえさ台を冬に作っています。トウモロコシなどを置くと、多い時には５羽くらいに群れたきれいな雄を見ることができます。渡り鳥たちのためにもリンゴやパンくずなど置いてえさ台

を作りましたが、短い期間しかとどまらないせいか、えさ台には渡り鳥がなかなかつかず、カラス類が主にやってきてしまいます。

(4)学校で書いた自然保護のポスターを観光客などの出入りする港に掲示したりして、海鳥の繁殖地に立ち入らないように、ごみなどを捨てていかないように呼びかけています



6．まとめ

３、４、５で述べたことを中心に、現在野鳥愛護活動を行っています。私達が観察を始めた頃は鳥の名前が全くわからず、図鑑を放せない状態でした。でも、少しずつ鳥のことがわかってくるにつれて鳥に対する興味もどんどん高まりました。そして、野鳥観察の輪が全校に広がっていきました。さらに、今年の春、うれしいことに「天売野鳥の会」が結成され、私達の活動が大人の人達にまで広がっていったのです。

今、天売島ではウミガラスがたいへん少なくなって問題になっていますが、私達はこれからも野鳥観察を続けていきます。そして、たくさんの海鳥や渡り鳥が安心して羽を休めることのできる「鳥たちの楽園」がいつまでも続くよう、天売島の自然を守っていきたいと思います。

環境庁自然保護局長賞
「三島池を中心とする本校愛鳥活動」

滋賀県山東町立大東中学校

1．学校及び三島池の概要

大東中学校は滋賀県の北東、伊吹山の麓にある。全校生徒は387名である。校地の南側に周囲800メートル、面積36370㎡の南北に長いだ円形の池があり三島池と呼ばれている。

昭和29年、この池の北側に学校が建築され、昭和31年より本校科学部が水鳥の観察活動を始めて今年でちょうど30年がたった。その間、昭和34年マガモの自然繁殖南限地の確認により、マガモとその生息地が県の天然記念物に指定された。その後、保護活動は毎日続けられている。

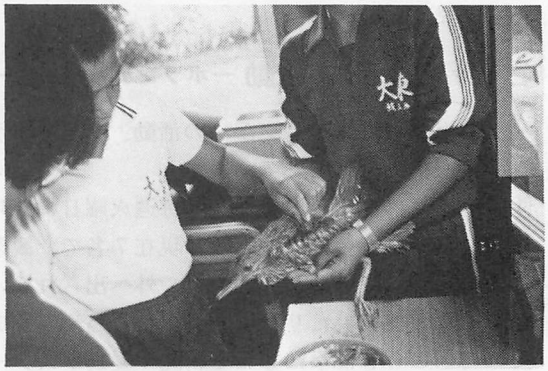
昭和46年４月には、県下で唯一の野鳥保護センターが建設された。それ以来、治療された野鳥は今年で450羽に達した。

2.生徒会並びに科学部年間愛鳥活動

４月　クラブ活動の組織づくり、親子フォーラムの案内と説明、水鳥の観察会、冬鳥の帰北観察
５月　野鳥の巣箱つくり、水鳥の巣の保護
６月　校内愛鳥展、愛鳥のつどい(生徒会)、水鳥の孵化観察、幼鳥の世話
７月　三島池の清掃
８月　自然観察ゼミナール参加
９月　案内板の点検
10月　冬鳥の飛来観察、水鳥の餌集め（生徒会）
11月　文化祭の愛鳥活動発表、三島池清掃
12月　池の水の管理、手紙や電話による水鳥の問い合わせ返信
１月　三鳥池のパトロール・案内、説明会
２月　水鳥の生態の研究
３月　帰北状況の調査、三島池清掃（生徒会）

科学部常時活動内容　野鳥の観察と給餌活動、傷病鳥の治療、三島池の水質調査と気象観測、水鳥についての質問者との文通、水鳥の数の表示（毎朝）

科学部を中心に野鳥の保護活動に取り組み、30年という古い歴史をもつ本校である。毎朝７時30分より、科学部員による観察活動が行われている。今では自然保護に対する心情が個々の生徒に浸透し、全校ぐるみの愛鳥活動が展開されている。その一端として、生徒会主催による春の「愛鳥のつどい」、夏の「三島池清掃」、秋の「水鳥の餌集め」等は他校にみられない特色といえる。



3．三島池での水鳥の生息変化に関する調査

本校科学部の過去の観察結果をもとに、主な水鳥の生息変化についてまとめた。

(1)主な水鳥の飛来状況

過去22年間の飛来初認知日を比較してみると、当初コガモとヒシクイが10月初旬に一番乗りし、少し遅れてマガモが飛来した。最近では、ヒシクイが極端に遅くなり、他は少しずつ早く飛来してきた。

(2)各年度別、最盛期１日最高個体数

昭和28年度マガモの１日最高個体数は100羽であったが、昭和45年度から急に増加し、昭和60年１月26日に過去最高の764羽になった。これは給餌活動の成果だと思われる。しかし、コガモとヒシクイは最近減少傾向にある。

(3)主な水鳥の各月ごとの年度別１日平均個体数の変化

①マガモの１日平均個体数　各月ともマガモの１日平均個体数は徐々に増え続けている。この間に三島池を取り巻く環境の変化、特に周辺の道路整備や浚渫工事がなされたが、ほとんど影響を受けることなく餌を求めて集まってくることがわかった。

②ヒシクイの１日平均個体数　ヒシクイは昭和38年から昭和49年ごろまでは10月から３月まで長い

期間飛来してきたのだが、その後、飛来期間が短くなってきた。ヒシクイは池周辺の環境の変化や池の中の葦の減少にかなり影響を受けているようである。特に警戒心の強い鳥で夜遅く飛来して朝早く飛び立つことがよくあった。

③コガモの個体数の変化　コガモは当初かなり飛来してきたが、最近マガモの増加にともない減少してきている。

④コサギの個体数の変化　昭和38年以後あまり大きな変化は見られなかったが、昭和60年9月より池の浚渫工事による水位低下のため魚を求めてサギが毎日100羽前後集まった。

⑤カイツブリの個体数の変化　カイツブリは昭和38年より数羽定住している。雛がかえっても、成長すると琵琶湖に移動するため数はほとんど変化しない。

⑥オオハクチョウの飛来　昭和60年1月2日午前10時30分、三島池に7羽のハクチョウが飛来した。早速部員が調べた結果、幼鳥2羽成鳥5羽のオオハクチョウとの確信を得た。滋賀県ではたいへん珍しいため県野鳥の会、日本白鳥の会に鑑定を依頼した結果、オオハクチョウであることが確認された。昭和59年1月中旬2日間1羽のオオハクチョウの幼鳥が三島池に飛来しているので、成長してその一家が飛来したものと思われる。さっそく日本白鳥の会の会長さんの指導を得て、年末からの吹雪により氷結している三島池に餌場を作った。数日でよく慣れ、餌を与えると近づいてきて食べるようになった。10日午前7時20分初めて飛び立ち、8時50分まで上空を施回して北方向に飛び去った。12日午後4時30分真っ赤な夕日に照らされながらV字の編隊を組んで優雅な姿を再び見せた。部員一同ほっとした。帰って来るとすぐ餌場に来た。

そして、2月15日早朝北の国に帰っていった。

4、三島池野鳥保護センターの活動

(1)傷病鳥の保護活動、450羽に達す

昭和46年4月、三島池のほとりに県下唯一の野鳥保護センターが建設されて以来現在までに約450羽の傷病鳥の治療にあたってきた。傷病鳥を持参した人たちの鳥との出会いは異なっていても「生命を大切にしよう」とする心は一つである。部員一同誠心誠意治療にあたってきた。獣医を通して持参されたものは薬もあり一応の治療はされているので安心である。しかし、直接持ちこまれるものも多く、今までの経験を生かし治療にあたっている。足や羽根の骨折等の場合、部会を開いて慎重に相談し、切断することもある。すっかり治って片足で元気に泳いでいる鳥を見ると生命の大切さをひしひしと感じる。さいわい、近くに外科医と獣医がおられ、相談に乗ってもらえるので助かる。ゴイサギなどは1日に100ぴきほどの生魚を食べるので、餌つかみもかなり忙しい。中には口ばしでつつかれ、今でも顔に傷跡が残っている部員もいる。

(2)昭和57年から昭和59年までの傷病鳥の状況

3年間に168羽の傷病鳥が県下各地から送られてきた。傷病状況の内訳は、外傷が47羽で28%、その内治癒したのは30羽で64%である。内疾は87羽で全体の52%、その内治癒したのは59羽で68%である。その他は34羽で全体の20%、その内治癒したのは5羽で15%である。その他で死亡した割合が多いのは雛で保護されたため十分食物が食べられなかったためである。

月別の保護状況を調べてみると、5月が37羽で22%、その内外傷は11羽で30%、内疾は12羽で32%、その他は14羽で38%である。しかし、6月になると62羽で全体の37%になり、内訳は外傷が6羽で10%に比べ内疾は42羽で68%もあった。また保護された野鳥の種類では、6月の62羽の内トビの内疾で保護されたものが18羽と特に多かった。トビは食物連鎖の頂点にいることから、私たちにもなにか警告を発している感じがする。保護した野鳥はその他17科37種であった。傷病鳥168羽の内治療して放鳥できるまでに回復できたのは97羽、全体の56%である。

5．三島池周辺に見られる山野の鳥の個体数

主なものはハシブトガラス・トビ、モズ、ヒヨドリ、ホオジロなど18科33種を確認している。

6．今後の課題

(1)環境の変化と水鳥の生息状況の関係

(2)野鳥の生態の研究と保護のあり方

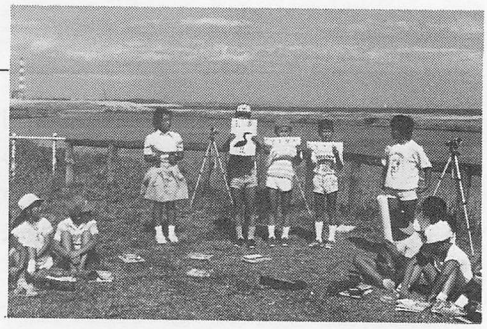
(3)傷病鳥の治療法の研究

(4)地域における愛鳥精神の啓蒙

日本鳥類保護連盟会長賞

「中野の自然と愛鳥活動」

宮城県仙台市立中野小学校



1．私たちの学校と、とりまく環境

私たちの学校は仙台市の東端、七北田川河口にあり、北側は仙台港、東側は渡り鳥の飛来地として知られる蒲生干潟になっています。

現在児童数255名、開校112年目の学校です。

このあたりは、仙台港建設による開発が進み、工場や道路が整備され、住宅が増えはじめるなど自然環境は急速に変わりつつありますが、七北田川や蒲生干潟を中心とする地域には、まだ貴重な自然が残されています。

このような豊かな自然環境を利用して、私たちの学校では昭和57年度から創意（ゆとり）の時間の中に愛鳥教育をとりあげ、干潟の野鳥の観察がはじまり、その後理科や特別活動の中にも位置づけられ、広く自然学習が進められてきています。

2．愛鳥教育のねらい

私たちの学校では、教育目標の中にふるさと教育目標が次のように位置づけられています。

教育目標

ふるさと教育目標

1．郷土のくらしのようすや歴史を知り、郷土への誇りと愛情をもってその向上発展につくす子どもを育てる。
2．郷土の自然に親しみ、その保全につとめ、住みよい生活環境をつくる子どもを育てる。
3．望ましい集団活動を通して連帯感を培い、勤労や奉仕を尊ぶ子どもを育てる。

重点指導目標

低学年　・学校のまわりの様子に関心をもたせ動物や水花を大切にする心情を育てる。
中学年　・郷土のくらしのようす、移りかわりや郷土のよさ土のよさを知り自分たちの生活環境をととのえようとする態度を育てる。
高学年　・郷土の特色を知り、進んで住みよい生活環境を築こうとする実践的態度を育てる。

科　道徳	特別教育活動	創意の時間	その他の教育活動
地域素材の教材化	・野鳥クラブ ・緑化委員会 ・学級園学校園等	・杉の子タイム	・野鳥観察部 ・地域の自然便り

3．年間の活動計画

(1)創意（ゆとり）の時間の活用

縦て割り活動（杉の子タイム）における春秋の全校観察会、5月の海浜植物観察会、各学級による観察会（各学期1回）

(2)理科の学習として

毎月1回は干潟に出かけ、地域の自然全体（植物・動物・地学）を学習する。

(3)特別活動として

野鳥クラブは毎週月曜日のクラブの時間を中心に、野鳥観察部はその他の時間常時活動。児童会活動としては、シンボルバード、愛鳥新聞コンクール、野鳥を守る立て看板作りなどがある。

4．愛鳥活動の実際

私たちの愛鳥活動は(1)実際に自分の目で確かめ、進んで調べていこうとする〝**野鳥を知り親しむ活動**〟、(2)進んで野鳥のためになることを工夫しようとする〝**野鳥を守る活動**〟、(3)まわりの人々に愛鳥の心を拡めようとする〝**愛鳥の心を広める活動**〟の3つを柱として行ってきました。

(1)野鳥を知り親しむ活動

①蒲生干潟の野鳥の調査　4年前から調査を続けています。特にクラブの時間を中心に行っています。確認された野鳥は100種以上に上ります。調査の結果は、校内の愛鳥コーナーに「○月の野鳥」という形で地図といっしょにはり出され、全校の児童に知らされます。これらの鳥の年間の種類や数の変化を示すためグラフにしました。

②コアジサシの営巣の調査　毎年訪れているコアジサシの卵とヒナの生育状態、分布の様子について調査しました。

③サギの観察　サギはいつごろ渡ってきて、一日一日どんな行動をし、一年間の生活史はどのようなものかについてまとめました。

④学校のまわりに来る野鳥の観察　校舎内にある「杉の子ミニバードサンクチュアリ」には、11月

～4月にかけて餌を求めてヒヨドリ、シジュウカラ、ホオジロ、カワラヒワ、キジ、モズ、スズメなどが訪れており、その観察記録をつけています。
⑤野外観察の時は、ひとりひとりが「観察ノート」を持って出かけ、見つけた鳥の絵や、特徴を書きます。ただ鳥の名前がわかるだけでなく「足跡の分析」「偽傷」などその行動の特徴も学んでいます。
⑥理科の時間には、野鳥ばかりではなく地域の自然全体について学習しています。砂浜の小さな動物や植物について知るようになってから、鳥の餌ともなるこれ等の動物たちが、ひとつひとつ目に見えない糸でつながっていて、どれひとつ欠けても干潟の自然がくずれてしまうことを知り、蒲生干潟全体の環境を守ることの大切さを強く感じました。

(2)野鳥を守る活動

①つり糸・つりばりの回収　足がちぎれて1本しかないホウロクシギ等を見た時、私たちはどうしても干潟に来る野鳥たちを守らなければならないと考えました。こうして年2回の全校つりばり・つり糸回収活動が昨年からはじまりました。しかし、毎回100mを越える糸の長さになるので、つりをしている人にはマナーをよく守ってほしいと呼びかけています。
②コアジサシの卵・ヒナを守る　私たちがその生長を楽しみにしているコアジサシの卵やヒナは、心ない人たちのジープやバイクの乗り入れで多くがふみつぶされることもあります。そこで、児童会では立て看板を立てる等して、それらを守っています。
③傷ついた野鳥を救う　巣から落ちてしまったコサギやゴイサギのヒナたちが子どもたちや地域の人々から学校に持ち込まれますが、私たちは応救手当てをして、八木山動物園に保護してもらってきました。
④巣箱の清掃と給餌　給水台の製作　私たちは11月の終わりに、これまでかけていた巣箱の清掃と調査、給餌・給水台作りをします。
⑤餌木の育成　学校の北側には餌木がたくさんあります(80本以上)。これからも父兄に呼びかけ鳥の好む実のなる木をふやしていきたいと思っています。

(3)愛鳥の心を広める活動

①野鳥写真・模型（バードカービング）の展示学校の玄関には野鳥の写真、バードカービングが並んでおり、来校してきた人たちにも鳥を知ってもらうための努力をしています。
②図書室の愛鳥コーナーには鳥に関する本が500冊以上も置かれ、鳥や自然に関することは何でも調べたりすることができます。
③愛鳥放送とビデオを使っての学習　昼の放送では、野鳥の声や、野鳥クイズ、野鳥ニュースなどが行われ、授業ではビデオを利用して野鳥の学習をしています。
④愛鳥新聞　先生の発行している「翔」と、野鳥クラブの「翼」がありますが、最近では全校での愛鳥新聞コンクールも開かれ、地域に愛鳥の心を伝えています。
⑤シンボルバード　児童会で話し合い、今年度は学校の野鳥も「コアジサシ」と決定しました。
⑥愛鳥週間の行事　5月の愛鳥週間には春の干潟の観察会と共に、行事をもりあげる工夫として巣箱、ポスター、作文、標語コンクールを開いています。
⑦親子観察会　親も野鳥に対して興味を持つようになり、今年度からＰＴＡの行事として親子観察会が行われるようになりました。

5．今後の自然教育活動

私たちは、これから以下のことを自然教育活動として進めていきたいと思います。

(1)野鳥を知り親しむ活動　野鳥クラブだけでなく愛鳥委員会を作り、より活動を活発にしていく。中野小ひとりひとりの子どもたちが野鳥日記をつけ継続観察できるようにする。

(2)野鳥を守る活動　校内につり糸・つり針箱を設置したり、愛鳥の心を呼びかける立て看板を増やしたい。

(3)愛鳥の心を広める活動　バードウィークに愛鳥集会を開きたい。今年度から愛鳥文集「干潟」を作りたい。

私たちは野鳥や海浜の動植物の学習を通して自然のつり合いの大切さ、蒲生干潟全体の環境を守る大切さを学びました。今後も〝野鳥を愛し自然を愛する心〟を学校だけでなく地域の人々にも広げ、鳥や植物などすべての生き物が仲よくくらしていける環境をいつまでも守り続けていきたいと思います。

日本鳥類保護連盟会長褒状

「川上村のクマタカの生態観察」

奈良県川上村立川上中学校

1．学校周辺の生物

私達の川上村には、カモシカ、ツキノワグマ、タヌキ、テン、イタチ、モモンガ、ムササビ、リスと日本に生息する主要野生哺乳類をほぼ見ることができます。そして植物においても630種類ほどの数多くの植物がみられます。まさに私達は、すばらしい自然環境の中で生活しているといっても過言ではありません。川上中学校の周りでも、いろいろな植物が生育し、時々ニホンザルやクマタカなど珍しい動物を見ることができます。

このようなすばらしい自然環境の中にあって、当初理科クラブは、学校周辺の自然に目を向けるということで学校周辺の植物の観察をしていました。その時に川上村のクマタカの生態観察を続けていらっしゃる地元野鳥の会の菊田さんに出会い、豊富なクマタカの生態観察の話を聞き、それがきっかけで、菊田さんの指導のもとに川上村に生息するクマタカの生態観察をするようになりました。

2．クマタカの調査開始

昭和56年10月からクマタカの生態観察を始めています。以来4年間、川上村のほぼ全区域においてクマタカの生態観察を続けています。

3．クマタカの生態

奈良県におけるクマタカの周年活動は、11月中旬の求愛から翌々年の4月中旬の幼鳥追放までの2年にまたがる子育ての生活と言ってよいでしょう。クマタカはイヌワシと並ぶ山岳ワシの代表です。観察を通して最も感心したことは、クマタカどうしで決して激しい争いをしないということでした。1つがいが約4000ヘクタールに及ぶ生活圏をもち、それは互いに重なっているのですが、クマタカどうしが出会った場合には、サインである浅い波状飛行をすることであっさりさり自分の領域に帰ります。

しかし抱卵期から孵化後2週間の間は営巣樹を中心にした半径200から300メートルの範囲にはカラスやカケスでさえ入れません。また大型種でありながら小回りのきく体形をしており、そのハンティングの多様性には目を見はるばかりです。小鳥からニホンザルまでが捕獲の対象になってしまうのです。

幼鳥の巣立ちに関してはこれまで不明でしたが、私達の観察では、巣を出てもそれきりでなく何度でも帰ってくるのです。57年には落巣幼鳥ですら落巣後47日を経過してなお帰巣していることが確認されました。これからのことから「初出巣」と「巣立ち」を区別して考えました。（後述）

次に周年活動について少し述べます。11月中旬、求愛期に入りますが幼鳥がしばしば間に割り込んできます。親による追い出しが始まるのですが、幼鳥が雌の場合はそれほどはげしくありません。求愛行動のなかで代表的なのは波状飛行です。その他X字型交差飛行やすさまじい急降下などが見られます。これは雌へのディスプレイです。そして11月下旬からは見晴らしのよい尾根の止り木での長時間に及ぶ見張り行動が始まります。記録では5時間30分が最長です。1月初旬から中旬にかけては営巣地決定期です。雌雄で山腹をなめるように飛んでいますが、最終的には、垂直急降下が行われた谷が決定地となります。巣づくりは2月中旬から下旬にかけて行われますが、古巣を補強使用することがほとんどです。大きさは直径が1メをこえるものもまれではありません。その厚さは新しいもので30センチ、古巣を連続使用しているものでは1メートルにも達します。巣の中央部には針葉樹の青葉が敷かれて最終仕上がりとなります。また産卵までの10日間ほどを「産卵前期座巣」と位置づけました。産卵は3月6～9日、孵化は4月20日～22日、抱卵日数は42～46日間と推定できました。抱卵はほとんど雌が行います。抱卵期間中の雌の食餌は雄が運んでいます。巣内育児は雌の仕事であり、雄は餌運びに明けくれます。寒い時には胸の下にだき、日ざしが強くなれば羽

を広げて日かげを作ります。食餌は全て雌が口うつしで行います。孵化後1ヶ月位でやっと自分で餌をつつきますがまだちぎることはできません。6月の中旬ともなると純白の幼メン羽にかわり茶色の本羽が目立ってきます。体格は母親より少し小さい位にまで成長しています。羽ばたき練習も本格的になり、とび上るような動作が始まります。7月中旬、雌の警戒は緩み、カケスがヒナの口から餌をとったりすることもあります。ヒナの食餌量がふえるため雌雄でハンティングに出て行きますが、雌は必ず近くにいます。7月下旬やっとヒナが初飛行を行いますが数日前から巣を支えている枝に出たりしています。初出巣後も帰巣し親も餌を運び時には給餌もしています。9月から翌4月中旬頃までの巣外学習でハンテイングや警戒心を学んでいきます。そしてこの頃すでに新しいヒナの誕生が目前に迫っているのです。

4.(観察例)巣立ちから若鳥の学習まで

先輩達の観察ノートには、「昭和58年7月24日(日)曇、井光伐採跡地で、5時50分、ヒナは巣の中央に立っている。親鳥巣内には見えない。5時55分ヒナは、巣の一段上の枝（左にのびる）にこちら向きで止まっている。嗉のうは少しふくらんでいる。5時58分、ヒナ左方に飛び立つ。力強く懸命にはばたいて谷を越え、斜面の茂みに入る。巣から約150メートル、水平な位置。姿はみえないが時々そのあたりの木がゆれている。7時17分、茂みから発進、一直線に巣の上の枝にとびついた。こちら向きに立って翼を少しゆする。7時21分、ヒナ50センチ左に移動。左向きになる。体色は後背は茶色がはっきりしている。尾の長さは親の3分の2で短いのが特に目立つ。じっと動かない。」とあります。そして初飛行から1ヵ月後、8月21日に幼鳥は巣から約100メートル離れた場所にネグラを求めて外泊しています。その後も巣に帰って眠ったり外泊したりのくりかえしをしていますが、8月28日以後は、夜は巣に帰らず、自分のねぐらを確保して眠るようになっています。そして親鳥もその行動を見届けるように、餌を巣で食べさせることをせず、近くの枯れ木で食べさせています。この時期を私達は「初出巣」とは異なった真の「巣立ち」と考えました。8月下旬になると、幼鳥は親鳥から餌をもらいながら、自分で狩猟

を始めようとしています。しかしいきなり獲物をつかまえることができないため、親鳥が幼鳥に対して学習のためか、10月16日には、母鳥がいったん獲物をつかまえて上昇した後に急降下して地上にその獲物を置き再び上昇すると、上空にいた幼鳥が直ちにこの獲物に向って急降下した後、その場で獲物を食べるという珍しい光景を観察しています。そしてヒナの行動範囲も、初飛行の時は約150メートルの往復でしたが、初外泊をした8月21日を機に活動節囲は半径300から400メートルに広がり、10月6日の観察では500メートル以上となってきました。しかしまだ巣の谷の範囲内です。それが10月30日にはついに1キロをこえ、11月に入ると活動半径は2キロにまで広がっています。そして8月21日に幼鳥は初めてハンティングを試みています。この時はキジバトを襲っていますが失敗しています。しかし9月6日にはキジバトを急襲し見事にしとめています。

5. 今後にむけて

以上の結果や考察は、先輩たちの涙ぐましい努力によって作られた多くの観察ノートの蓄積とそのあとを受け継いだ私達の観察やまとめでできたものです。

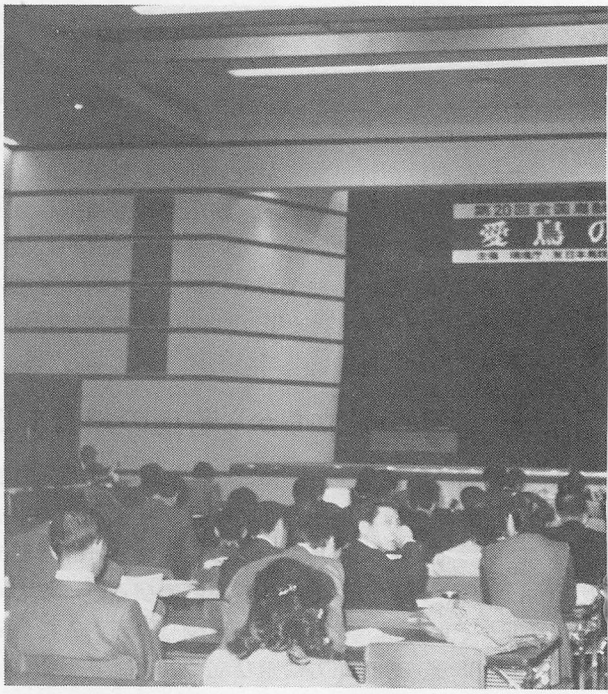
今後も先輩達に負けないよう地道な観察活動を続け、同時にその輪をより広め、クマタカが生息する川上村の自然環境を守っていかなければいけないと思っています。

第20回全国鳥獣保護実績発表大会

第20回全国鳥獣保護実績発表大会は、昭和60年12月8日(水)、環境庁（中央合同庁舎5号館講堂）にて開催された。プログラムは以下のようであった。

〈プログラム〉

開　　会	10：00
主催者挨拶	環境庁自然保護局長
	(財)日本鳥類保護連盟代表
実績発表	（発表時間　各校15分）
小学校（5校）	(1)愛知県滝脇小学校
	(2)神奈川県南が丘小学校
	(3)東京都戸倉小学校
	(4)宮城県中野小学校
休　憩(昼食)	
小学校　（続）	(5)北海道天売小学校
中学校（3校）	(6)滋賀県川上中学校
	(8)愛媛県城川東中学校
高等学校(1校)	(9)静岡県県立三ヶ日高等学校
「実績発表大会」審査結果発表及び講評	
表　彰　式	
お祝いの言葉	環境庁長官
閉　　会	16：35



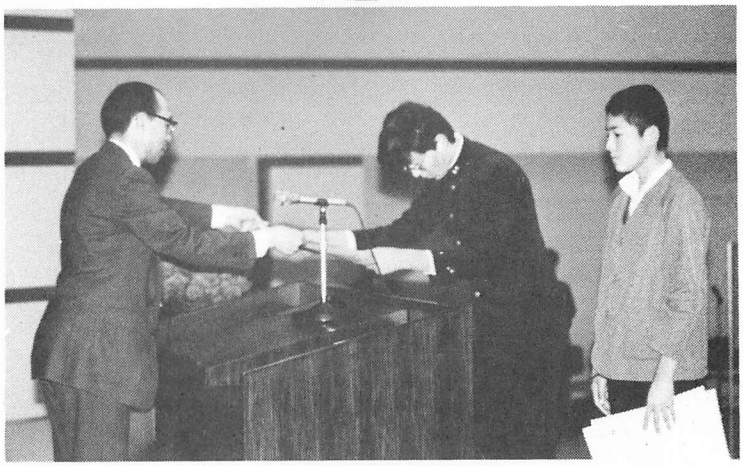
児童生徒の発表より

児童生徒の発表より

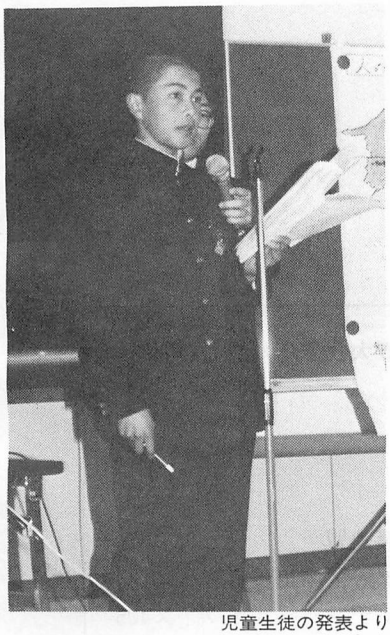
写真記録

環境庁長官お祝いの言葉より

愛鳥のつどいの開会、環境庁自然保護局長の挨拶



表彰式より



児童生徒の発表より

閉会後、環境庁長官とともに

第20回全国鳥獣保護実績発表大会愛鳥のつどい記録

昭和61年３月

発行　環境庁
受託　㈶日本鳥類保護連盟
〒150 東京都渋谷区宇田川町37—10
渋谷レジデンシャルオフィス405
Tel 03(465)8601

第20回全国鳥獣保護実績発表大会報告書について

● 本報告書は、(財)日本鳥類保護連盟が環境庁から委託を受けて実施した「第20回全国鳥獣保護実績発表大会」の報告書を、環境庁自然保護局長の承認を受けて発行したものです。

（承認　昭和61年３月10日　環自鳥40号）

● 本報告書の表紙作品は、今大会(財)日本鳥類保護連盟会長賞受賞校宮城県仙台市立中野小学校児童の共同制作による大版画（90センチメートル四方）６枚のうちのひとつです。「蒲生の干潟」と題する本作品は、子供たちが、実際に観察しているフィールドを表現したもので、朝日の輝き、鳥たちの生命力が印刷では表現できない程にあふれています。

――編集後記――

●具体的指導方法論の情報交換の場を！

全国各地の先生方や地域教育に関心のある方の情報交換の場にすることが本研究会会誌「愛鳥教育」の大きな目標の一つになっています。先日も熱心な会員の方から「愛鳥教育を進める上での、具体的な指導方法論に関して、相互に情報交換できるような〝コラム〟を企画してみてはいかがでしょうか！」というご要望がありました。本来の目標にたちかえって、このようなコラムを会員の皆様の手で作ってみませんか。…原稿用紙はできれば１行22字でお願いします。76行でこの本誌一頁分にあたります。図や表もおおいに歓迎します。ただし、若干の編集上の修正の可能性や応募が多い場合は全部載せられない場合があることを、あらかじめお断わりしておきます。

●愛鳥教育を教科の授業で教えることを可能にしたテキスト

第20回全国鳥獣保護実績発表大会において㈶日本鳥類保護連盟会長賞受賞校宮城県仙台市立中野小学校から、本事務局に以下の内容の本を贈呈して頂きました。

本の題名は、「わたしたちの中野」。仙台市の蒲生干潟を中心とした自然のようす。地域のようすが、豊富なカラー写真や図表そしてわかりやすい文章で表現されています。特にこの本で強く印象に残ったことが２点ありました。一つは、編集執筆がすべて当小学校の先生方でなされており、正に手作りのテキストだということ。

そして、もう一つは、愛鳥教育を教科の中に位置づけるためにこのテキストが作られたことです。

このテキストの大きさはB5版。総頁数は、約160頁。そのうち約50頁の自然編は野鳥を中心にしながらも蒲生の自然全体が理解できるように作成されています。定価は1800円(実際はもっとかかったたようです）。関心のある方は、仙台市立中野小学校（ＴＥＬ：0222-58-2365）へご連絡下さい。

中野小学校では、このテキストの指導書も現在作成中ということです。

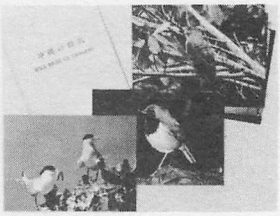
今まで教科のなかでは難しいといわれていた愛鳥教育を、教科教育の中にもよりしっかりと位置づけようとするこの学校の試みは画期的なものといえましょう。

以上、編集後記としては長すぎましたが、長すぎついでにもう一つ、６頁のイラストについて一言。これは、鳥類保護連盟のボランティアの方から頂いたものです。その（物質的な）お礼もなし「愛鳥教育のためでしたらその図をコピーしようが切り抜こうがかまいません。」ということで著作権もなし、しかもご本人の希望で署名もなし。なしが三拍子そろって愛鳥教育研究会にその原画を寄贈して下さいました。この三つのうちに前二つはなしの条件で、どんどん愛研事務局に「鳥」や「鳥のいる風景」の図をお送り下さいとの宣伝もかねながらも、お礼の気持ちでもってご報告させてもらいました。（杉）

JAPB フィールドショップ

■絵ハガキ・花と野鳥
八枚組　五〇〇円(〒一〇〇円)
発行・JPフォト

■絵ハガキ・鳥のファミリー
8枚組　600円(〒70円)
発行・日本鳥類保護連盟



■絵ハガキ・沖縄の野鳥
6枚組　500円(〒70円)
発行・沖縄野鳥研究会

■庭に小鳥を
三〇〇円(〒一七〇円)
発行・日本鳥類保護連盟

■野鳥を見に
三〇〇円(〒一七〇円)
発行・日本鳥類保護連盟

■たのしいぬりえ
三八〇円(〒二〇〇円)
発行・オートスライド

■写真集・野鳥讃歌
三八〇〇円(〒三〇〇円)
和田剛一著　発行・小学館

■世界の鳥・行動の秘密
七〇〇〇円(〒五〇〇円)
発行・旺文社
〈新刊〉

■スミレ事典
一八〇〇円(〒二五〇円)
発行・月刊さつき社
〈新刊〉

■小鳥が元気になる本
九八〇円(〒二〇〇円)
発行・ネイチャーアイランド社
〈新刊〉

■干潟のチドリ・ダイゼン
一二〇〇円(〒三〇〇円)
発行・いちい書房
〈新刊〉

▶お申し込みは、現金書留または郵便振替でご送金ください。まとめて注文すると、送金が安くなります。あらかじめ問い合せください。

▶販売物等の売り上げは、愛鳥教育や小鳥がさえずる森づくり等、緑豊かな街づくりに取り組む連盟の活動資金に活用させていただきます。

(財)日本鳥類保護連盟(JAPB)
〒150 東京都渋谷区宇田川町37－10－405
☎03－465－8601
振替・東京5－19214